博多58

－博多遺跡群第86次発掘調査概報－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第526集

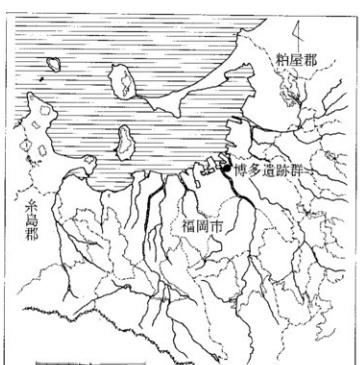
1997

福岡市教育委員会

博　多 58

－ 博多遺跡群第86次発掘調査概報 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第526集



遺跡略号　HKT－86
遺跡調査番号　9436

1997

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに100次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書はホテル建設に伴って実施された第86次調査の概要を報告するものです。国際貿易都市「博多」の繁栄を示す輸入陶磁器の出土等、大変興味深い成果を収めています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた地権者の西嶋正司氏、施工の高木工務店の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　言

1．本書はホテル建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成６(1994)年度に発掘調査を実施した福岡市博多区祇園町13、16、17所在の博多遺跡群第86次調査の報告である。

2．本書に掲載した遺構・遺物の実測、撮影は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。

3．製図は遺構を藤村佳公恵、遺物を佐藤が行った。

4．本書の執筆・編集は佐藤が行った。

5．本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されれるので、活用されたい。

調査番号	９４３６		遺跡略号	ＨＫＴ－86	
調査地地籍	福岡市博多区祇園町13、16、17		分布地図番号	大神４９	
開発面積	４７９㎡	対象面積	４７９㎡	調査面積	４７９㎡
調査期間	1994（平成６年８月24日～10月31日				

本 文 目 次

序
Ⅰ　はじめに……1
　1　調査にいたる経過……1
　2　調査の組織……1
Ⅱ　発掘調査の概要……3
Ⅲ　遺構と遺物……5
　1　検出遺構……5
　2　出土遺物……8
Ⅳ　小結……24

表　目　次

第1表　出土土器計測表……25

挿 図 目 次

第1図　博多遺跡群発掘調査地域図……2
第2図　博多遺跡群第86次調査地域周辺図……3
第3図　博多遺跡群第86次調査遺構配置図……4
第4図　井戸実測図（1）……6
第5図　井戸実測図（2）……7
第6図　井戸実測図（3）……9
第7図　井戸実測図（4）……10
第8図　井戸実測図（5）……11
第9図　土壙実測図……12
第10図　SE02・03出土遺物実測図……14
第11図　SE04・12・22・24・25出土遺物実測図……16
第12図　SE26・29・31・33（1）・34・35出土遺物実測図……17
第13図　SE33（2）出土遺物実測図……18
第14図　SE37出土遺物実測図……19
第15図　SK09出土遺物実測図……20
第16図　SK11・27・32・SE43・SX06・SD40出土遺物実測図……21
第17図　SB48出土遺物実測図……22

図 版 目 次

図版1 （1）博多遺跡群第86次調査区西半全景（南から）
（2）博多遺跡群第86次調査区東半全景（南東から）
図版2 （1）ＳＥ02・03井戸（西から） （2）ＳＥ02・03井戸土層（北西から）
（3）ＳＥ04井戸（西から） （4）ＳＥ04井戸土層（西から）
（5）ＳＥ05井戸（南から） （6）ＳＥ05井戸土層（南東から）
図版3 （1）ＳＥ12井戸（南西から） （2）ＳＥ12井戸土層（南西から）
（3）ＳＥ20井戸（南から） （4）ＳＥ20井戸土層（南から）
（5）ＳＥ22井戸（南西から） （6）ＳＥ22井戸土層（南から）
図版4 （1）ＳＥ24井戸土層（南西から） （2）ＳＥ25井戸（西から）
（3）ＳＥ25井戸土層（西から） （4）ＳＥ26井戸（北から）
（5）ＳＥ26井戸土層（北東から） （6）ＳＥ33井戸土層（西から）
図版5 （1）ＳＥ29井戸（南から） （2）ＳＥ29井戸土層（北東から）
（3）ＳＥ31井戸（北西から） （4）ＳＥ31井戸土層（北西から）
（5）ＳＥ34井戸（南から） （6）ＳＥ34井戸土層（西から）
図版6 （1）ＳＥ35井戸（西から）） （2）ＳＥ35井戸土層（南西から）
（3）ＳＥ37井戸（北東から） （4）ＳＥ37井戸土層（西から）
（5）ＳＥ42井戸（南東から） （6）ＳＥ43井戸土層（東から）
図版7 （1）ＳＫ09土壙（北東から） （2）ＳＫ10土壙（南西から）
（3）ＳＫ11土壙土層（東から） （4）ＳＫ14土壙（北西から）
（5）ＳＫ27土壙（南東から） （6）ＳＸ06土壙（東から）
図版8 （1）ＳＤ44溝土層（北から） （2）ＳＤ40溝（北から）
（3）ＳＤ40溝土層（西から） （4）ＳＤ46・47溝（南西から）
（5）ＳＫ07土壙（南から） （6）ＳＢ48竪穴住居跡（東から）
図版9 ＳＥ02・03出土遺物
図版10 ＳＥ04・12・22・25・26・29・31出土遺物
図版11 ＳＥ24出土遺物
図版12 ＳＥ33・34・35出土遺物
図版13 ＳＥ37出土遺物
図版14 ＳＫ09出土遺物
図版15 ＳＫ27出土遺物
図版16 ＳＥ43・ＳＫ11・32・ＳＸ06・ＳＤ40・ＳＢ38出土遺物

Ⅰ はじめに

1　調査にいたる経過

1992年４月27日、西嶋正司氏から本市に対して博多区祇園町13、16、17におけるホテル建築に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の南側に位置し、申請地をはさんで北西側隣接地には第32次調査地、南東側隣接地には第９次調査地、さらに南東側に第65次調査地、第59次調査地が続く。福岡市教育委員会埋蔵文化財課はこれを受けて1994年１月19日に試掘調査を実施した。現況は駐車場で、調査の結果、深く攪乱が及んではいるものの現地表下2mで遺物包含層、地山の黄白色砂上面で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護にかんする協議をもったが、申請面積479㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。西嶋正司氏と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年８月24日から10月31日まで行われた。

2　調査の組織

調査委託　西嶋正司氏

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

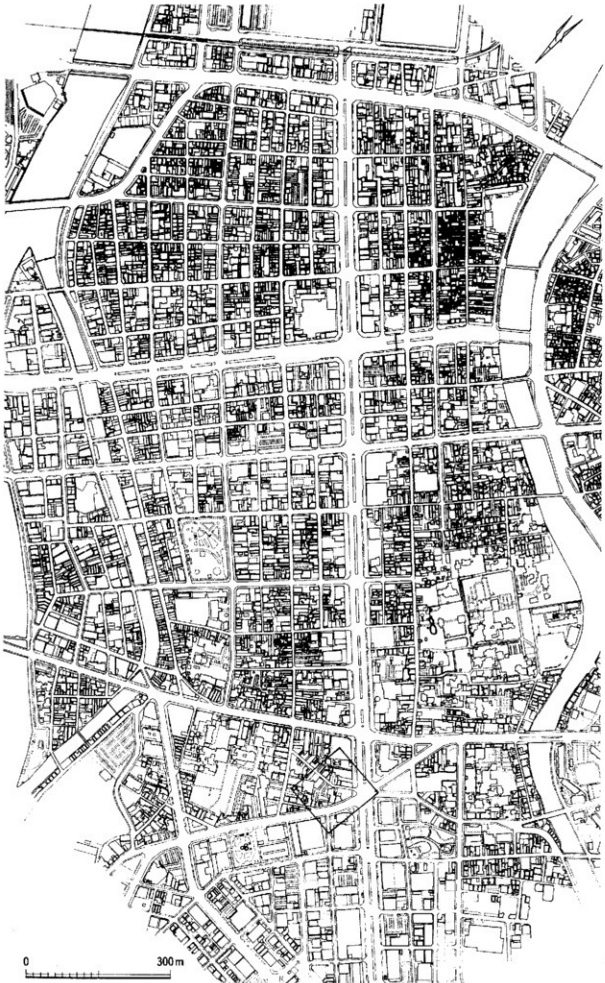
調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　學（前任）　光巻輝勝
第２係長　山崎純男（前任）　山口譲治

庶務担当　西田結香

調査担当　試掘調査　山口譲治　菅波正人
発掘調査　佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者　尾化憲吾・楠本純次・柴田博・中村米重・森本良樹・伊藤美伸・尾崎真佐子・河津信子・桑原美津子・為房紋子・津川真千代・播磨博子・福田友子・藤原直子・早子輝美・山口慶子・吉住シズエ・萬スミヨ・相川和子・有島美江・田中ヤス子・藤野邦子・藤村佳公恵

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の西嶋正司氏、施工の株式会社高木工務店をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

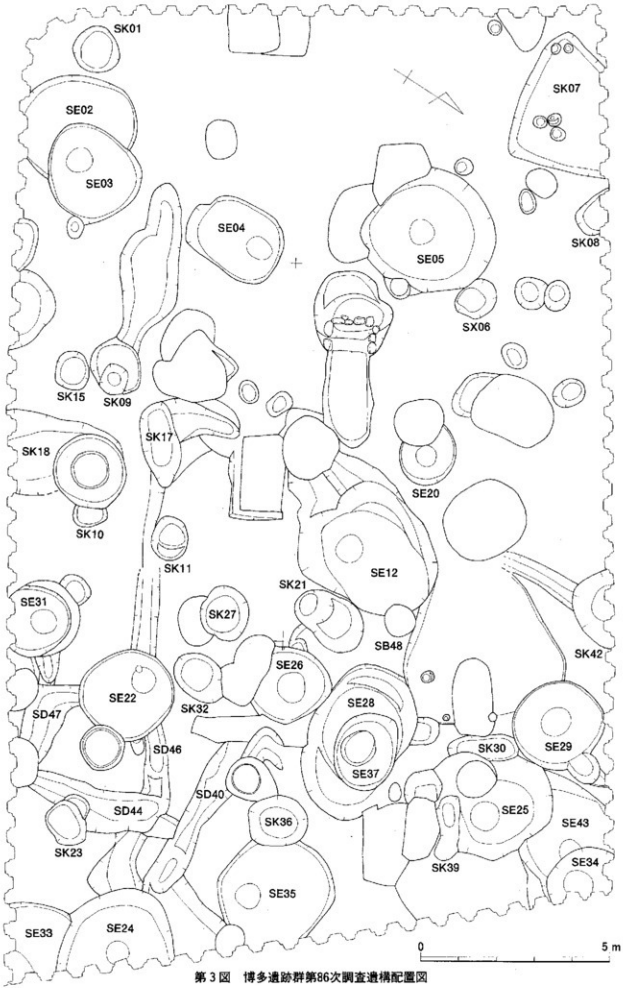


第1図　博多遺跡群発掘調査地域図

Ⅱ　発掘調査の概要

調査地は博多浜の南側に位置する。試掘調査で近現代の攪乱が深く及ぶことが確認され、８月24日から福岡市埋蔵文化財課事前審査担当立会いの下、重機による鋤取り、土砂の搬出作業から調査を開始した。一部南半部を中心として古代の遺物包含層（灰褐色砂）が残されていたが、試掘調査の所見以上に攪乱は深く及んでおり、地山の黄褐色砂まで及ぶところもみられた。地山の標高3.5ｍを測る。鋤取り後の遺構からの排土の処理は発掘調査区域内で行うこととし、東西に調査区を分けて発掘作業を進めた。先ず、道路に面した東側を排土置き場として、西側3/5から調査を開始し、10月６日から排土移動後、東側残り2/5の調査に着手し、10月31日に調査は終了した。検出された遺構は12世紀後半から13世紀前半にかけてのものがほとんどで、井戸14基の他、土壙多数を検出した。他の時期の遺構では後世の遺構に切られた４世紀前半の竪穴住居跡の断片１、13世紀後半から14世紀前半にかけての土壙１基、14世紀後半から15世紀前半にかけての井戸１基を検出した。

第２図　博多遺跡群第86次調査地域周辺図



第３図　博多遺跡群第86次調査遺構配置図

Ⅲ 遺構と遺物

1 検出遺構

井戸

SE02（第4図、図版2） 調査区の南西部で検出した。掘り方は上面径3.2mの略円形を呈し、深さは2.4mを測る。南端部は調査区外に延びる。東側がSE03井戸に切られ、井戸枠は残存していない。

SE03（第4図、図版2） 調査区の南西部で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは2.2mを測る。SE02井戸を切る。基底部南側に上端径57cm、下端径53cm、深さ75cmの桶側が据えられていた。

SE04（第6図、図版2） 調査区の南西部で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは2.0mを測る。基底部北側に上端径70cm、下端径65cm、深さ76cmの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE05（第4図、図版2） 調査区の北西部で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さは2.0mを測る。SX06土壙を切る。基底部中央に上端径85cm、下端径40cm、深さ1.3mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE12（第5図、図版3） 調査区のほぼ中央で検出した。掘り方は上面径3.9mの略円形を呈し、深さは2.3mを測る。基底部南側に上端径62cm、下端径64cm、深さ12cmの桶側が据えられていた。地山の黄色砂と粗砂の境が標高2.3m付近にみられる。

SE20（第6図、図版3） 調査区の中央部北寄り検出した。掘り方は上面径1.7mの略円形を呈し、深さは1.7mを測る。南端部は攪乱を受けている。基底部中央に上端径50cm、下端径60cm、深さ1.1mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE22（第6図、図版3） 調査区の南東部で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは2.4mを測る。東端部は攪乱を受けている。基底部西側に上端径65cm、下端径58cm、深さ2.2mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE24（第6図、図版4） 調査区の南東端で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さは2.0mを測る。SE33井戸を切り、東半部は調査区外に延びる。基底部中央に上端径52cm、下端径63cm、深さ1.6mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

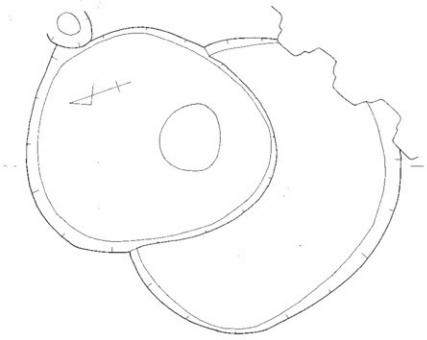
SE25（第7図、図版4） 調査区の北東部で検出した。掘り方は上面径3.1mの略円形を呈し、深さは2.1mを測る。西側および南側をＳＫ30・39土壙に切られ、SE43井戸を切る。基底部東側に上端径70cm、下端径80cm、深さ50cmの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

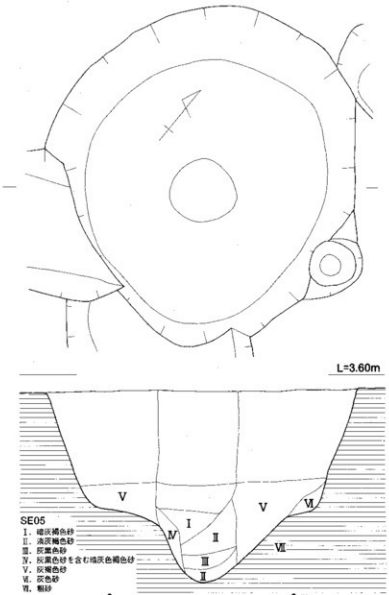
SE26（第7図、図版4） 調査区の中央部東寄り検出した。掘り方は上面径2.2mの略円形を呈し、深さは2.3mを測る。南端部は攪乱を受けている。基底部中央に上端径77cm、下端径60cm、深さ1.8mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE29（第8図、図版5） 調査区の北東部で検出した。掘り方は上面径2.4mの円形を呈し、深さは1.9mを測る。基底部中央に上端径65cm、下端径65cm、深さ1.0mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

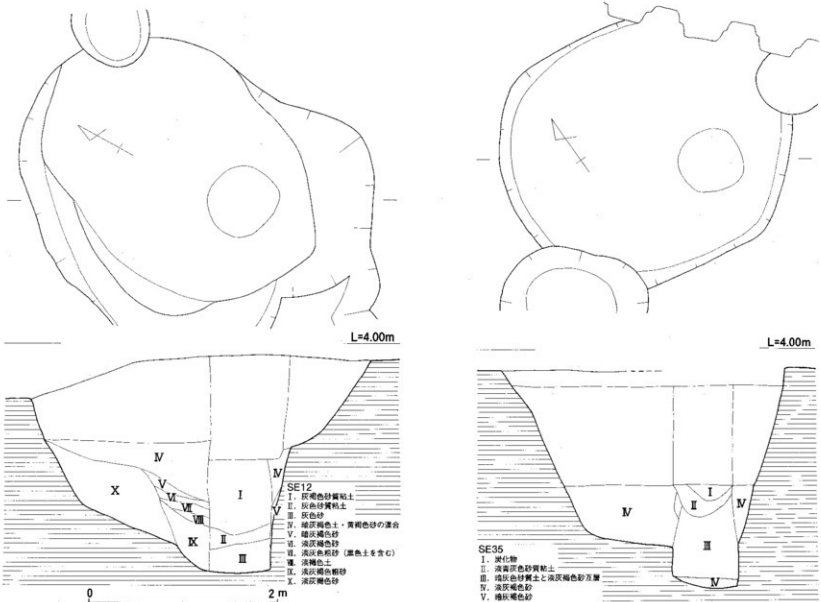
SE31（第7図、図版5） 調査区の南端部で検出した。掘り方は上面径2.1mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。上面は攪乱を受けている。基底部のやや北側に上端径65cm、下端径50cm、深さ1.1mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE33（第4図、図版4） 調査区の南東端で検出した。SE24井戸に切られ、南東側は調査区外に


L=3.80m
SE02・03
Ⅰ．青灰色砂
Ⅱ．淡灰褐色土
Ⅲ．灰色砂
Ⅳ．青灰色砂と灰褐色砂が
2～3cm単位で縞状に堆積
Ⅴ．淡灰褐色砂
Ⅵ．粗砂


L=3.60m
SE05
Ⅰ．暗灰褐色砂
Ⅱ．淡灰褐色砂
Ⅲ．灰黒色砂
Ⅳ．灰黒色砂を含む暗灰色褐色砂
Ⅴ．灰褐色砂
Ⅵ．灰色砂
Ⅶ．粗砂
0
2m

第４図　井戸実測図（１）


L=4.00m
SE12
Ⅰ. 灰褐色砂質粘土
Ⅱ. 灰色砂質粘土
Ⅲ. 灰色砂
Ⅳ. 暗茶褐色土・黄褐色砂の混合
Ⅴ. 暗灰褐色砂
Ⅵ. 淡灰褐色砂
Ⅶ. 淡灰色粘砂（黒色土を含む）
Ⅷ. 淡褐色土
Ⅸ. 淡灰褐色粘砂
Ⅹ. 淡灰褐色砂
0
2 m
L=4.00m
SE35
Ⅰ. 炭化物
Ⅱ. 淡灰褐色砂質粘土
Ⅲ. 暗灰色砂質土と淡灰褐色砂互層
Ⅳ. 淡灰褐色砂
Ⅴ. 暗灰褐色砂

第５図　井戸実測図（２）

延びる。基底部には桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE34（第７図、図版５） 調査区の北東端で検出した。SE43井戸を切り、北東側は調査区外に延びる。基底部には桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE35（第５図、図版６） 調査区のほぼ東端で検出した。掘り方は上面径3.2ｍの略円形を呈し、深さは2.3ｍを測る。東端部は調査区外に延びる。西側がSK36土壙に切られ、基底部南側に上端径63㎝、下端径70㎝、深さ1.1ｍの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE37（第８図、図版６） 調査区の東側で検出した。掘り方は上面径2.6ｍの略円形を呈し、深さは2.3ｍを測る。SE28井戸を切る。基底部中央に上端径60㎝、下端径60㎝、深さ1.3ｍの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE43（第８図、図版６） 調査区の北東端で検出した。SE34井戸に切られ、北端部は調査区外に延びる。基底部南側に上端径55㎝、下端径70㎝、深さ1.3ｍの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

土壙

SK09（第９図、図版７） 調査区の中央南寄りで検出した。平面形は楕円形を呈する。全長1.5ｍ、幅1.3ｍ、深さ80㎝を測る。土師器小皿、杯類が多量に廃棄されていた。

SK10（第９図、図版７） 調査区の南側中央で検出した。平面形は楕円形を呈する。西側は撹乱を受けている。全長0.9ｍ、幅0.5ｍ以上、深さ47㎝を測る。埋土上層の灰色砂中には牡蠣殻が含まれていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

SK11（第９図、図版７） 調査区の南側、SK10土壙の北2ｍで検出した。平面形は楕円形を呈する。全長1.4ｍ、幅1.2ｍ、深さ60㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

SK14（第９図、図版７） 調査区の南西部で検出した。南半部は調査区外に延びる。径2.2ｍ、深さ95㎝を測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

SK27（第９図、図版７） 調査区のほぼ中央、SK11土壙の北東2.5ｍで検出した。平面形は略円形を呈する。径0.4～0.6ｍ、深さ80㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

SK32（第９図） 調査区の中央東寄りで検出した。北西部は撹乱を受けている。平面形は楕円形を呈する。全長1.6ｍ、幅1.1ｍ、深さ1.1ｍを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

土壙墓

SX06（第９図、図版７） 調査区の北西部で検出した。南端部はＳＥ05井戸に切られる。平面形は隅丸方形を呈する。全長1.2ｍ、幅0.9ｍ、深さ35～60㎝を測る。壁はやや斜めに立ち上がり、墓壙の北西で瓦器椀が底面より20㎝浮いた状態で出土した。長径はほぼ東西方向に方位をとる。

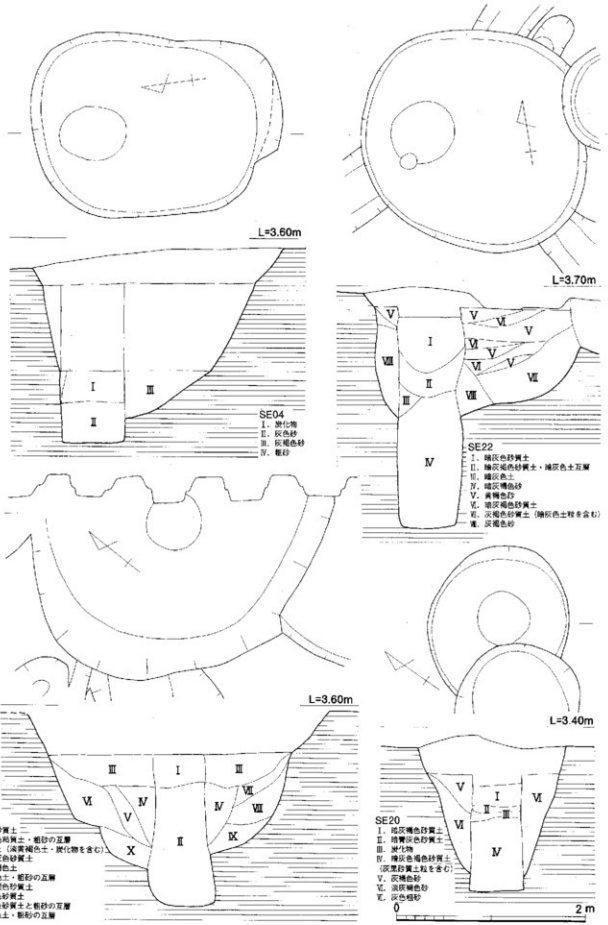
2 出土遺物

SE02出土遺物（第10図、図版９） １・４が掘り方、２・３は井戸枠内からの出土。

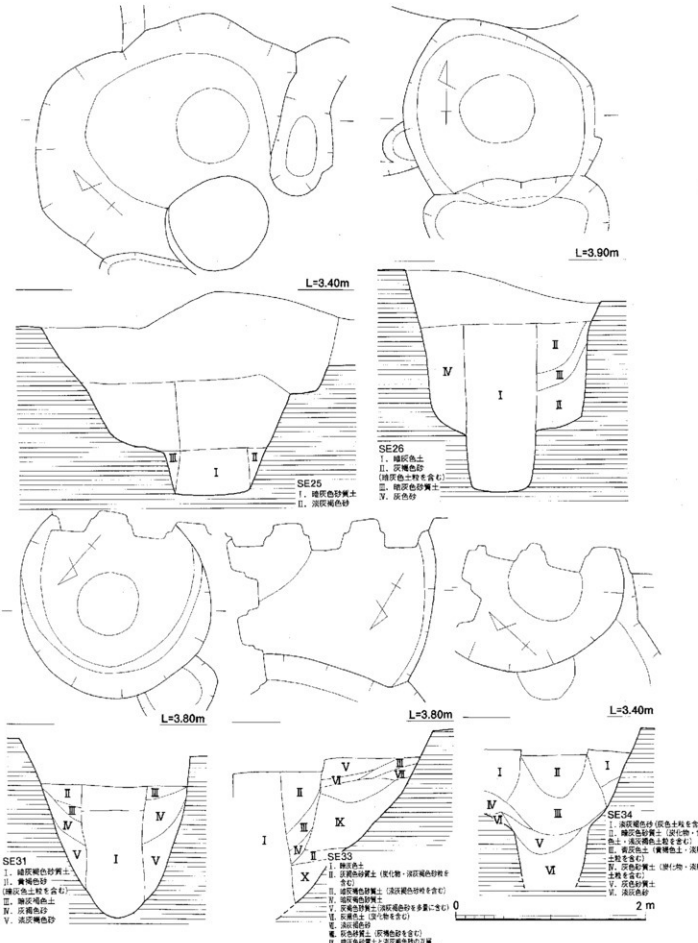
陶器 長瓶（１） 断面三角形の折り返し口縁がつく。体部下半はロクロ目が明瞭に残り、底部付近はヘラ削りされる。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が底部のやや上までかけられている。

白磁 皿（４） 口縁部が外反し、内底見込みに沈圏線をもつ高台付皿である。胎土は灰白色を呈し、釉色は灰オリーブ色透明を呈する。

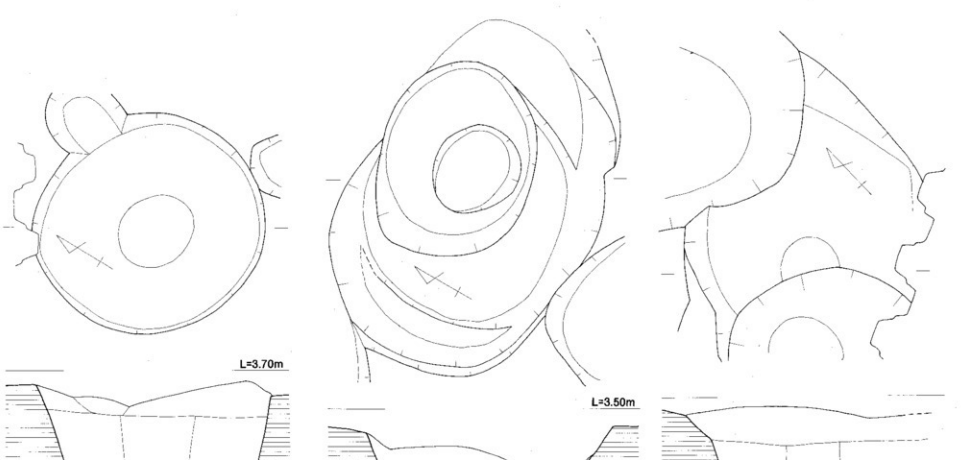
青白磁 合子（２・３） 側面に蓮華座を型押ししてつくり出す。２の胎土は白色を呈し、釉色は明青灰色透明を呈する。外底部は露胎である。３の胎土は灰白色を呈し、釉色は灰白色を呈する。口縁部立ち上がりから蓋受け部にかけてと外底部は露胎である。


L=3.60m
SE04
Ⅰ. 岩化物
Ⅱ. 灰色砂
Ⅲ. 灰褐色砂
Ⅳ. 粗砂
L=3.70m
SE22
Ⅰ. 暗灰色砂質土
Ⅱ. 暗灰褐色砂質土・暗灰色土互層
Ⅲ. 暗灰色土
Ⅳ. 暗灰褐色砂
Ⅴ. 黄褐色砂
Ⅵ. 暗灰褐色砂質土
Ⅶ. 灰褐色砂質土（暗灰色土粒を含む）
Ⅷ. 灰褐色砂
L=3.60m
SE24
Ⅰ. 灰色砂質土
Ⅱ. 暗色粗質土・粗砂の互層
Ⅲ. 灰色土（炭黄褐色土・炭化物を含む）
Ⅳ. 暗茶灰色砂質土
Ⅴ. 暗灰褐色土
Ⅵ. 暗灰色土・粗砂の互層
Ⅶ. 暗灰褐色砂質土
Ⅷ. 暗灰色砂質土
Ⅸ. 暗灰色砂質土と粗砂の互層
Ⅹ. 灰褐色土・粗砂の互層
L=3.40m
SE20
Ⅰ. 暗灰褐色砂質土
Ⅱ. 暗青灰色砂質土
Ⅲ. 炭化物
Ⅳ. 暗灰色褐色砂質土
（炭混砂質土粒を含む）
Ⅴ. 灰褐色砂
Ⅵ. 淡灰褐色砂
Ⅶ. 灰色細砂
0
2 m

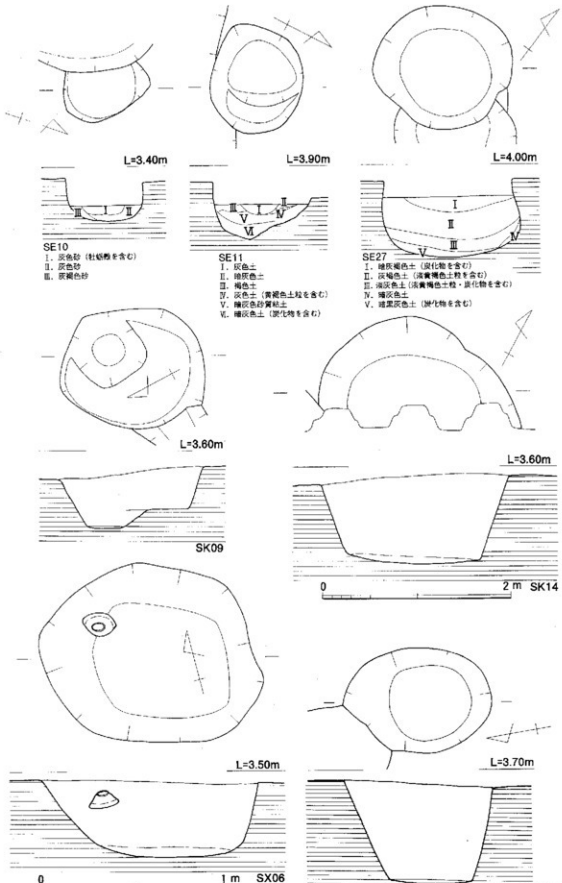
第６図　井戸実測図（３）


L=3.90m
L=3.40m
SE25
Ⅰ. 暗灰色砂質土
Ⅱ. 淡灰褐色砂
SE26
Ⅰ. 暗灰色土
Ⅱ. 灰褐色砂
(暗灰色土粒を含む)
Ⅲ. 暗灰色砂質土
Ⅳ. 灰色砂
L=3.80m
L=3.80m
L=3.40m
SE31
Ⅰ. 暗灰褐色砂質土
Ⅱ. 黄褐色砂
(暗灰色土粒を含む)
Ⅲ. 暗灰褐色土
Ⅳ. 灰褐色砂
Ⅴ. 淡灰褐色砂
SE33
Ⅰ. 黒色土
Ⅱ. 灰褐色砂質土(炭化物・淡灰褐色砂粒を含む)
Ⅲ. 暗灰褐色砂質土(淡灰褐色砂粒を含む)
Ⅳ. 暗灰褐色砂質土
Ⅴ. 灰褐色砂質土(淡灰褐色砂を多量に含む)
Ⅵ. 灰黒色土(炭化物を含む)
Ⅶ. 淡灰褐色砂
Ⅷ. 灰色砂質土(灰褐色砂を含む)
Ⅸ. 暗灰色砂質土と淡灰褐色砂の互層
Ⅹ. 暗灰褐色砂質土と淡灰褐色砂の互層
SE34
Ⅰ. 淡灰褐色砂(灰色土粒を含む)
Ⅱ. 暗灰色砂質土(炭化物・黄褐色土・淡灰褐色土粒を含む)
Ⅲ. 褐灰色土(黄褐色土・淡灰色土粒を含む)
Ⅳ. 灰色砂質土(炭化物・淡灰色土粒を含む)
Ⅴ. 灰色砂質土
Ⅵ. 淡灰色砂
0
2 m

第7図　井戸実測図（4）


L=3.70m
SE29
Ⅰ．灰色砂質土
Ⅱ．灰色砂
Ⅲ．灰色砂（黄褐色土粒・粘砂ブロックを含む）
Ⅳ．黄褐色砂（暗灰褐色土粒を含む）
Ⅴ．粗砂
L=3.50m
SE37
Ⅰ．灰色砂質粘土
Ⅱ．暗灰褐色砂（暗灰色砂ブロックを含む）
Ⅲ．灰色砂
Ⅳ．灰色土
Ⅴ．淡灰色砂
Ⅵ．淡灰褐色砂
Ⅶ．灰褐色砂
Ⅷ．暗灰褐色砂質土
Ⅸ．灰褐色砂質土
Ⅹ．炭化物
ⅩⅠ．灰色砂質土
ⅩⅡ．暗灰褐色砂
SE43
Ⅰ．暗灰色土と淡灰褐色砂の互層
Ⅱ．暗灰褐色砂と暗灰色砂質粘土の互層（炭化物・黄褐色土粒を含む）
Ⅲ．淡灰色シルト（黄褐色土粒を含む）
Ⅳ．暗灰色シルト
Ⅴ．淡灰褐色土
0
2 m

第 8 図　井戸実測図（5）


L=3.40m
SE10
I．灰色砂（軽石粒を含む）
II．灰色砂
III．灰褐色砂
L=3.90m
SE11
I．灰色土
II．暗灰色土
III．褐色土
IV．灰色土（黄褐色土粒を含む）
V．暗灰色砂質粘土
VI．暗灰色土（炭化物を含む）
L=4.00m
SE27
I．暗灰褐色土（炭化物を含む）
II．灰褐色土（淡黄褐色土粒を含む）
III．淡灰色土（淡黄褐色土粒・炭化物を含む）
IV．暗灰色土
V．暗黒灰色土（炭化物を含む）
L=3.60m
SK09
L=3.60m
SK14
0
2 m
L=3.50m
SX06
0
1 m
L=3.70m
SK32

第９図　土壙実測図

SE03出土遺物（第10図、図版9）　7・13～18が掘り方、他は井戸枠内からの出土。

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（5～11）　口径 8.9～ 9.4cm、器高 0.9～ 1.3cm、底径 6.4～ 7.5cmを測る。

杯（12）　口径14.6cm、器高 2.4cm、底径10.0cmを測る。

白磁

碗（13・14）　13は粗雑に削り出された高台をもった底部片で、胎土は灰白色、釉色は淡黄色を呈し、貫入が多くみられる。外底に墨書があるが、判読困難である。14は内刳りが浅い断面台形の小さな高台をもつ底部片で、内底見込みに段がつく。胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈し、貫入が多くみられ、高台との境付近までかけられている。釉下には化粧土がかけられている。外底部に「陳□」の墨書がある。

皿（15）　口縁部が外反し、内底見込みを輪状に掻き取る高台付皿である。胎土は灰黄色を呈し、釉色は灰白色透明を呈する。

青磁

碗（16）　口縁部は欠失している。体部内面に花弁文、内底見込みに花文を片彫りする。胎土は灰白色を呈し、釉色は灰オリーブ透明を呈する。露胎の外底部に「吉光」の墨書がある。

高台付皿（17）　口縁部は外反し、内底見込みが平坦な高台付皿である。体部は下位で屈曲し、底部との境をなし、その内面には段がつく。見込みには簡略化したヘラ描きの花文、その周に之字形点線文を配す。胎土は灰白色を呈し、釉は緑灰色透明で貫入が多くみられ、高台との境付近までかけられている。外底部に「久」の墨書がある。

陶器　小口瓶（18）　口縁部から体部上半が欠失している。体部下半はロクロ目が明瞭に残る。残存部位は無釉である。胎土は直径1㎜前後の白色砂粒を含み、灰色、露胎では灰オリーブを呈する。晋江磁竈窯産であろう。外底に墨書がみられるが、判読困難である。

SE04出土遺物（第11図、図版10）　19は掘り方からの出土。

白磁　碗（19）　細く高い高台をもつ碗Ⅴ類の底部である。内底見込みに沈線状の段がつく。胎土は灰白色を呈し、釉は淡黄色を呈し貫入・ピンホールがみられる。高台の外面まで釉がかけられている。外底部に「大」の墨書がある。

SE12出土遺物（第11図、図版10）　他に水晶の結晶が出土している。

瓦器　小皿（20）　コテの様なもので平滑に仕上げられているが、ヘラ磨きの痕はみられない。胎土は砂粒を少量含んだ精良なもので、色調は暗青灰色～明青灰色を呈する。

SE22出土遺物（第11図、図版10）　24・25・27が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器　小皿（21）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.5cm、器高1.2cm、底径7.4cmを測る。

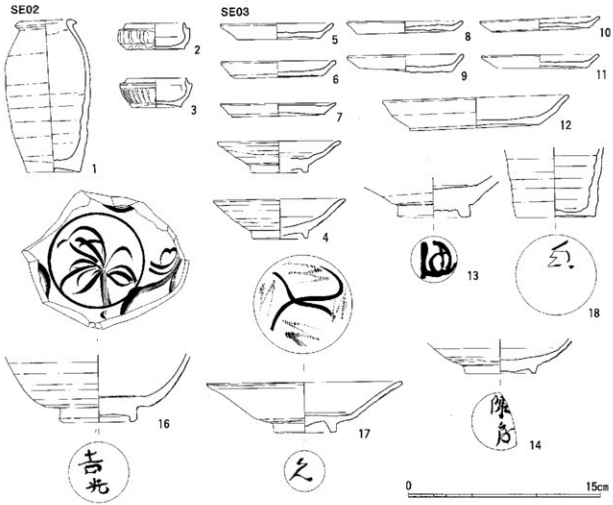
白磁　碗（22）　碗Ⅴ類の底部で、胎土は白色、釉色は灰白色透明を呈する。外底部に「江」の墨書がある。

青磁

碗（23）　ヘラ描きの体部外面の蓮弁、内面の蕉葉文に櫛目を入れている。胎土は灰色を呈し、釉色は灰オリーブ色を呈する。底部が欠失し、残存部位にはすべて釉がかかっている。

皿（24）　やや大きめの皿である。内底見込みにヘラ描きの花文、その間に之字形点線文を配す。胎土は灰白色を呈し、釉は灰オリーブ色透明を呈し、貫入が多くみられる。

黒釉陶器　碗（25）　束口の天目茶碗である。口縁下で屈曲し、口縁直下の内面はわずかにくぼみ



第10図　ＳＥ02・03出土遺物実測図

明瞭な稜をなす。内底部は平坦で、高台の内弱りは浅く外縁は面取りされる。胎土は青灰色、釉色は紫黒色で、口唇部や露胎部分境界付近の釉が薄い部分は褐色を呈する。外底に墨書がみられるが、判読困難である。

陶器

壺（26）　口縁下で屈曲した端部は丸くおさめられ、やや外傾する。直立した頸部には横方向に連続して印文が施される。胎土は明黄褐色を呈する精良なもので、淡緑色の釉が口縁部に残存し、他のは剥落している。

平皿（27）　上げ底の底部の削り出しは粗雑で、体部から口縁部にかけて丸みをもつ。胎土は灰オリーブ色、釉色は浅黄色を呈する。

SE24出土遺物（第11図、図版11）　29・30が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器

小皿（28）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.6cm、器高1.1cm、底径6.3cmを測る。

杯（29・30）　底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。口径12.8cm、器高2.6・2.9cm、底径9.0・9.6cmを測る。

鍋（32～34）　32は口縁部がやや外反しているが、体部からほぼ直線的にのびる。口縁部内面に横

方向、体部内面は斜め方向、底部付近は内外面とも横方向の刷毛目を施す。外面一面には煤が厚く付着し、体部中位付近は指頭圧痕が残る。胎土には砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。33・34は口縁部がやや内湾気味に体部からほぼ直線的にのびる。口縁部内面に横方向、体部内面は斜め方向、底部付近は内外面とも横方向の刷毛目を施す。外面一面には煤が厚く付着し、体部中位付近は指頭圧痕が残る。胎土には砂粒を含み、色調は33がにぶい黄橙色、34はにぶい黄褐色を呈する。

瓦器　椀（31）　体部下位の屈曲部が肥厚し、口縁部はほぼ直線的にのびる。磨滅により調整は明瞭に観察されないが、コテの様なもので平滑に仕上げられてはいるものの、ヘラ磨きの痕はみられない。胎土には砂粒を含み、色調は口縁部が青灰色、その他の部位は暗青灰色を呈する。

SE25出土遺物（第11図、図版10）

土師器　杯（35）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径12.2cm、器高2.8cm、底径9.8cmを測る。

白磁　碗（36）　碗Ⅴ類の底部で、胎土は灰白色、釉色は灰白色を呈する。外底部に「丿」の墨書がある。

青磁

碗（37）　外面口縁下に雷文、体部に蓮弁のヘラ描き文様を施す。内底見込みには花文をスタンプする。全面施釉の後、高台内面の釉を輪状に掻き取る。胎土は明褐灰色、釉は灰オリーブを呈し細かい気泡が多くマットである。

皿（38）　外面下半は露胎で、内底見込みの釉を施釉後掻き取った平底の皿である。胎土は灰白色、釉は明緑灰色透明を呈する。

SE26出土遺物（第12図、図版10）　39～41が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（39）　口径8.8cm、器高1.1cm、底径7.6cmを測る。

杯（40）　口径15.8cm、器高2.7cm、底径11.6cmを測る。

白磁　碗（41～43）　41は内底見込みを輪状に掻き取る碗Ⅷ類の底部で、釉は高台との境付近までかけられている。胎土は灰白色、釉色は灰白色を呈し、ピンホールがみられる。外底部に「大吉」の墨書がある。42・43は碗Ⅴ類の底部で、いずれも内面に櫛描き文を施し、胎土は灰白色、釉色は灰白色を呈する。外底に墨書がみられるが、判読困難である。

青磁　皿（44）　口縁部がわずかに内湾し体部からほぼ直線的にのびる。内底見込みに目痕が残り、高台の内側りは粗雑で浅く、外縁は面取りされる。胎土は橙色、釉はオリーブ灰色透明を呈する。

SE29出土遺物（第12図、図版10）　井戸枠内からの出土である。

青磁　皿（45）　外面下半が露胎の平底の皿である。焼成不良で、胎土は明黄褐色色、釉は緑灰色不透明を呈する。

SE31出土遺物（第12図、図版10）　いずれも井戸枠内からの出土である。

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

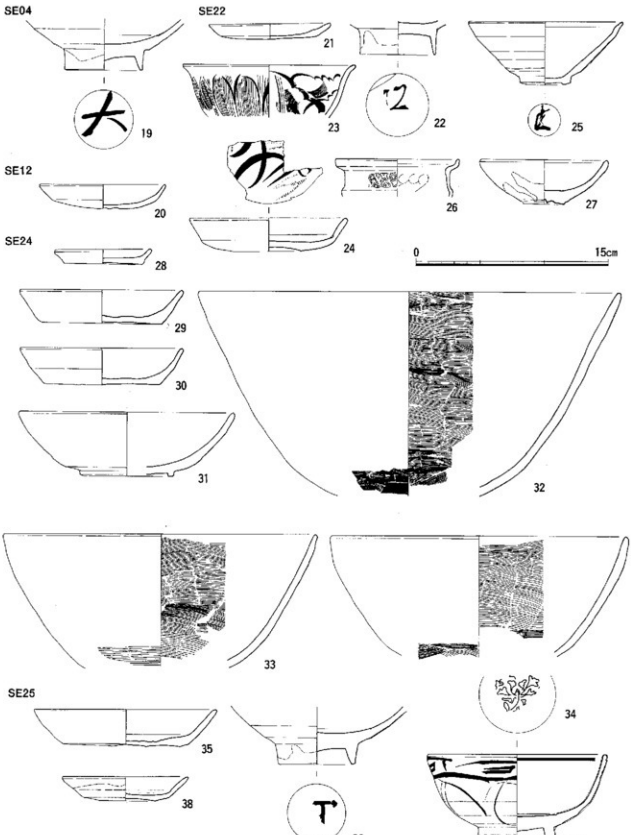
小皿（46）　口径9.2cm、器高1.3cm、底径7.1cmを測る。

杯（47）　口径15.7cm、器高3.4cm、底径9.2cmを測る。

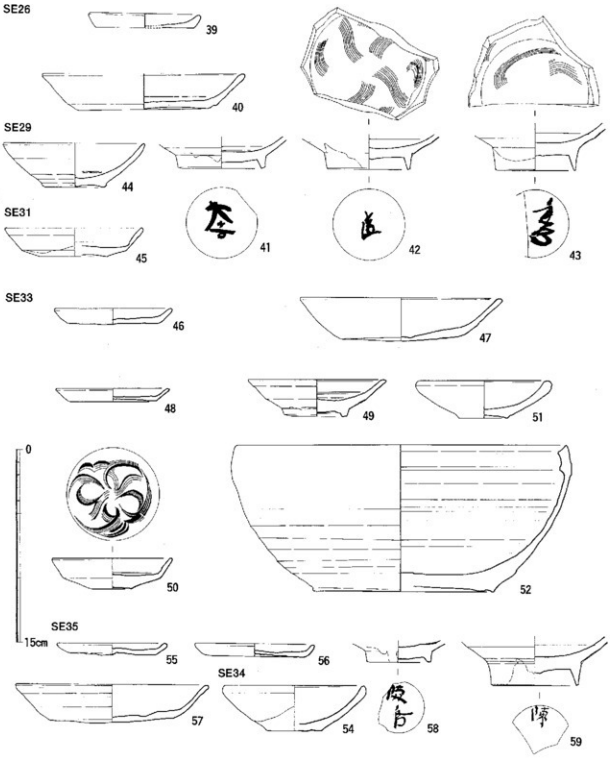
SE33出土遺物（第12・13図、図版12）　50～53が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器　小皿（48）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.8cm、器高1.0cm、底径6.7cmを測る。

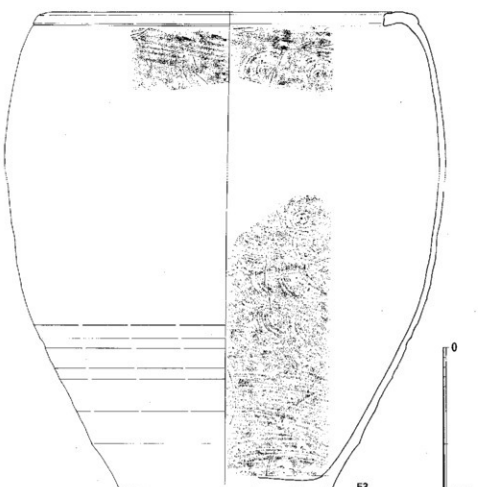
白磁　皿（49）　口縁部が外反し、内底見込みを輪状に掻き取る高台付皿である。胎土は灰黄色を



第11図　ＳＥ04・12・22・24・25出土遺物実測図



第12図　ＳＥ26・29・31・33（１）・34・35出土遺物実測図



第13図　ＳＥ33（２）出土遺物実測図

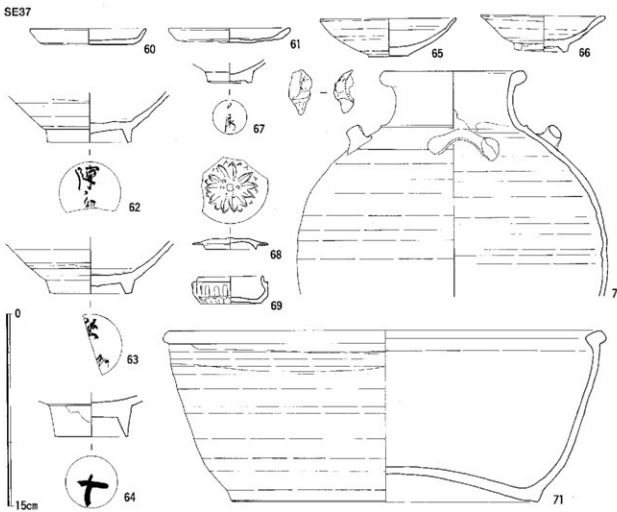
呈し、釉は灰白色不透明を呈し、ピンホールがみられる。

青磁　皿（50）　体部中位で屈曲し、口縁部はやや外反しているが、体部からほぼ直線的にのびる平底の皿の完形品である。内底見込みにヘラと櫛描きで花弁文を施す。全面施釉の後、外底部の釉を掻き取る。胎土は灰白色を呈し、釉は灰オリーブ透明を呈し、貫入・ピンホールがみられる。

陶器

平皿（51）　上げ底の底部から、わずかに内湾し肥厚した口縁部がほぼ直線的にのびる。胎土は暗褐色を呈し、釉色は黒褐色を呈する。

捏鉢（52）　口縁端部は内傾し、上面をくぼませる。口縁下内面に断面台形の隆帯をめぐらす。内面から体部外面にかけて回転横ナデされ、特に内面はロクロ目が残る。外底部は未調整で、目痕が残る。胎土には直径１～２㎜の砂粒を多量に含み、にぶい赤褐色を呈する。無釉である。



第14図　ＳＥ37出土遺物実測図

大甕（53）　口縁部が内に折れた大型の甕である。体部の外面上位には平行叩き、下位はヘラ削り、内面の上位から中位にかけては青海波の当て具痕が残る。胎土は赤褐色、釉は暗赤褐色を呈する。

SE34出土遺物（第12図、図版12）

陶器　平皿（54）　平底の底部から、やや内湾した口縁部がほぼ直線的にのびる。口縁端部上面を平坦とし、内傾させる。胎土は明黄褐色を呈し、釉色は暗褐色を呈する。

SE35出土遺物（第12図、図版12）　55・56が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

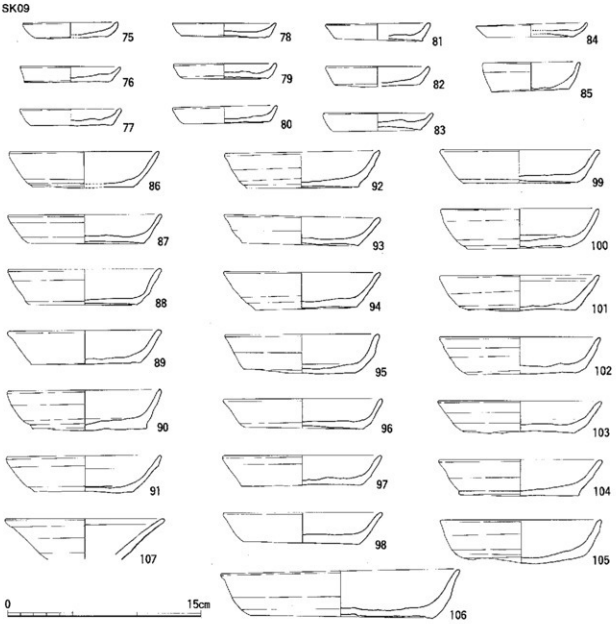
小皿（55・56）　口径8.5・9.3㎝、器高0.9・1.0㎝、底径6.8・8.6㎝を測る。

杯（57）　口径15.0㎝、器高3.0㎝、底径9.5㎝を測る。

白磁　碗（58・59）　58は内刳りが浅い断面台形の小さな高台をもつ底部片である。胎土は灰白色、釉色は淡黄色呈する。高台脇まで施釉され、外底部に墨書があるが判読困難である。59は碗Ⅴ類の底部で、胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈する。外底部に「陳□」の墨書がある。

SE37出土遺物（第14図、図版13）　61・64～66・70・71が井戸枠内、他は掘り方からの出土。

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。



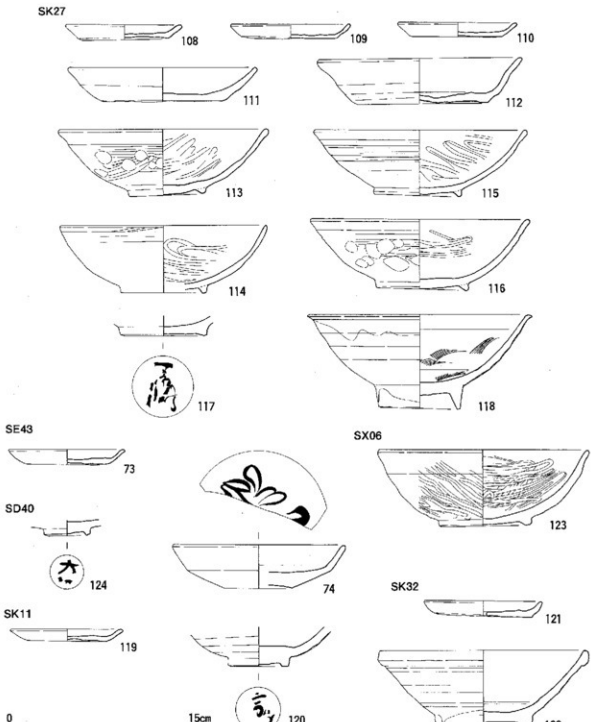
第15図　ＳＫ09出土遺物実測図

小皿（60・61）　口径9.0・9.5㎝、器高1.1・1.3㎝、底径6.9・8.2㎝を測る。

白磁

碗（62～64）　62・63は碗Ⅻ類の底部で、胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈する。外底部に「陳□」の墨書がある。64は碗Ⅴ類の底部で、胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈し、貫入がみられる。外底部に「十」の墨書がある。

皿（65・66）　65は底部がやや上げ底の平底の皿である。体部中位のやや上で屈曲し、その内面には沈圏線がめぐり、外反する口縁部がつく。胎土は灰白色、釉は緑灰色不透明を呈する。66は外反する口縁部に、内底部を輪状に掻き取った高台付皿である。胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈し、貫入がみられる。

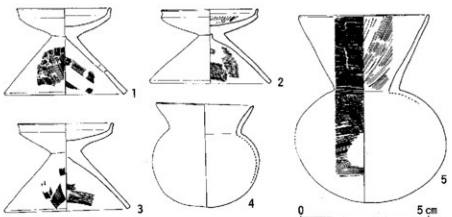


第16図　ＳＫ11・27・32・ＳＥ43・ＳＸ06・ＳＤ40出土遺物実測図

青白磁

小碗（67）　内刳りが浅い高台がつく底部である。胎土は白色、釉は無色透明を呈し、貫入が多くみられる。外底部に墨書があるが判読困難である。

小壺蓋（68）　天井部に花弁の文様を型押しする。返りの外面が露胎である。胎土は白色、釉は明青灰色透明を呈し、細かい気泡が多くみられる。



第17図　ＳＢ48出土遺物実測図

合子（69）　側面に蓮華座を型押ししてつくり出す。胎土は白色を呈し、釉色は明青灰色透明を呈する。口縁部立ち上がり外面から蓋受け部にかけてと外底部は露胎である。

陶器

四耳壺（70）　外反気味に直立する頸部に断面円形の折り返し口縁がつく。頸部と肩部の境には、型引きにより幅狭の断面三角形の突帯をめぐらせ、肩部の耳の付け根付近に沈線をめぐらす。体部下半以下は欠失している。胎土には黒色微粒子を含み、にぶい黄橙色を呈する。釉は褐色を呈し、頸部内面から体部の残存する範囲までかけられ、厚さにはむらがある。

盤（71）　断面が丸みをもった凹角形の折り返し口縁をもち、口縁端部上面は内傾している。底部は著しい上げ底となっている。胎土には直径１㎜前後の白色砂粒を含み、灰白色、露胎では灰オリーブ色を呈する。灰オリーブ色の釉が外面は折り返し口縁直下から内面にかけてかけられ、貫入が多くみられる。釉下には化粧土がかけられ、外面の口縁下の施釉範囲より外にみられる。肥前系窯産である。

土製人物像（72）　組み合わせ式の人物像の頭部である。前面から側面にかけて型によって成形され、後部は内刳りとなっている。胎土は精良で、色調はにぶい橙色、側面から後部にかけては黒色を呈する。

SE43出土遺物（第16図、図版16）

土師器　小皿（73）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.0㎝、器高1.1㎝、底径6.1㎝を測る。

青磁　皿（74）　やや大きめの平底の皿である。。内底見込みに花弁文を片彫りする。全面施釉の後、外底部の釉を掻き取る。胎土は灰白色を呈し、釉は灰オリーブ不透明を呈し、貫入が多くみられる。

SK09出土遺物（第15図、図版14）

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（75～85）　85は他と比して器高が高く口径に比して底径が小さい。75～84の口径7.4～8.7㎝、器高1.0～1.5㎝、底径5.7～6.9㎝を測る。85の口径7.7㎝、器高2.2㎝、底径6.1㎝を測る。

杯（86～105）　口径11.6～12.7㎝、器高2.2～3.4㎝、底径7.5～9.9㎝を測る。

大皿（106）　口径18.8㎝、器高3.5㎝、底径14.2㎝を測る。

黒釉陶器　碗（107）　直線的に大きく開いた斗笠形の白覆輪碗である。胎土には黒色微粒子を含み、灰白色を呈する。釉は口縁直下内面にめぐる沈線から端部にかけて灰黄色を呈し、貫入がみられる。

その他の部位は黒褐色を呈し、ピンホールがみられる。

SK11出土遺物（第16図、図版16）

土師器　小皿（119）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.7㎝、器高1.0㎝、底径8.0㎝を測る。

青磁　碗（120）　低い断面四角形の高台をもつ厚い底部片である。胎土は灰白色を呈し、釉は灰オリーブ色を呈し、貫入がみられる。露胎の外底に墨書がみられるが、判読困難である。

SK27出土遺物（第16図、図版15）

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(108～110)　口径9.2～9.4㎝、器高1.1～1.2㎝、底径7.1～7.4㎝を測る。

杯(111～112)　口径14.8・16.0㎝、器高2.7・3.4㎝、底径9.8・10.2㎝を測る。

瓦器　椀(113～116)　丸みをもった体部から口縁部が直線的にのびる。外面は横方向に、内面はZ字形にヘラ磨きを行う。胎土は砂粒を少量含み、精良で、色調は部位によって焼成むらがあるが暗紫灰色～明赤灰色を呈する。体部中位外面に指頭圧痕が明瞭に残るものもある。

白磁　碗（117・118）　117は高台内の削りが浅い椀Ⅳ類の底部である。露胎の外底に墨書がみられるが、判読困難である。胎土は灰白色を呈し、釉は灰白色透明を呈し、貫入が多くみられる。118は、口縁部が外反し端部やや外傾する。内面口縁下と見込みに沈圏線がめぐり、高台は細く高い。内面に櫛描き文を施し、胎土は灰白色、釉色は灰オリーブ色を呈し、高台脇まで施釉される。

SK32出土遺物（第16図、図版16）

土師器　小皿（121）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.2㎝、器高1.2㎝、底径7.6㎝を測る。底部中央に直径７㎜の孔を穿つ。

白磁　碗(122)　口縁を折り返し断面三角形の玉縁状となす。高台内の削りは浅く、外縁は面取りされる。内底見込みに沈線状の段がつく。胎土は灰白色、釉色は明灰緑色を呈する。

SX06出土遺物（第16図、図版16）

瓦器　椀（123）　肉厚の深めの椀である。丸みをもった体部中位のやや上で屈曲し、外反する口縁部がつく。外面は放射状に斜め方向、内面は幾重にもZ字形にヘラ磨きを行う。胎土には細かい砂粒を多量に含み、色調は口縁部が紫黒色、その他の部位は明赤灰色を呈する。

SD40出土遺物（第16図、図版16）

白磁　皿(124)　断面台形の内削りが浅い高台をもつ底部片である。高台外縁は面取りされる。胎土は灰白色、釉色は白色を呈する。釉下に化粧掛けか。外底に「大□」の墨書がある。

SB48出土遺物（第17図、図版16）

土師器

器台（１～３）　杯部は体部中位のやや上で屈曲し、外反する口縁部が直立気味に開く。脚部中央２か所に穿孔がある。調整は杯部外面がヘラ磨き、内面は横ナデ後暗文を施す。脚部外面が刷毛目後ヘラ磨き、内面は刷毛目を施す。胎土には砂粒を少量含み、色調は橙色～にぶい赤褐色を呈する。

壺（４）　口縁部が内湾気味に扁球形の胴部からほぼ直線的にのびる。外面はヘラ磨き、内面はナデを施す。胎土には砂粒を少量含み、色調はにぶい橙色を呈する。

直口壺（５）　扁球形の胴部から口縁部が直線的にのびる。調整は口縁部外面が横方向、内面は斜め方向、放射状にのヘラ磨き、胴部外面上半は斜め方向の刷毛目後横方向にヘラ磨き、下半が横方向に刷毛目を施す。胎土には砂粒を少量含み、色調は明赤褐色を呈し、外底部に煤が付着している。

Ⅳ 小　　結

検出された遺構は12世紀後半から13世紀前半にかけてのものがほとんどで、井戸14基の他、土壙多数を検出した。それらの遺構から出土した土師器の底部はすべて糸切離しによるものであるが、SE26・37、SK27には青磁は伴わず、土師器の法量も他の一群よりやや大きく遺構の時期を12世紀の前半（第２四半期）に遡らせられよう。SE02→SE03、SE33→SE24、SE43→SE25で明確に井戸の切り合いを確認できたが、SE33→SE24が12世紀後半～13世紀前半と13世紀後半～14世紀前半、SE43→SE25は12世紀後半～13世紀前半と14世紀後半～15世紀前半と出土遺物から１世紀以上の隔たりがあるが、SE02→SE03の関係は青磁を共伴するか否か1150年前後を境とした時期差で捉えることができる。SE02に良好な土師器が共伴していないのが惜しまれるが、大宰府ではほぼ同時とされる底部切離しのヘラから糸への移行期と龍泉窯系や同安窯系の青磁（初期のものを除いた一般的な）の出現のずれ、博多においては底部糸切離しへの移行が四半世紀は先行している事実を今回の調査でも追認することができよう。

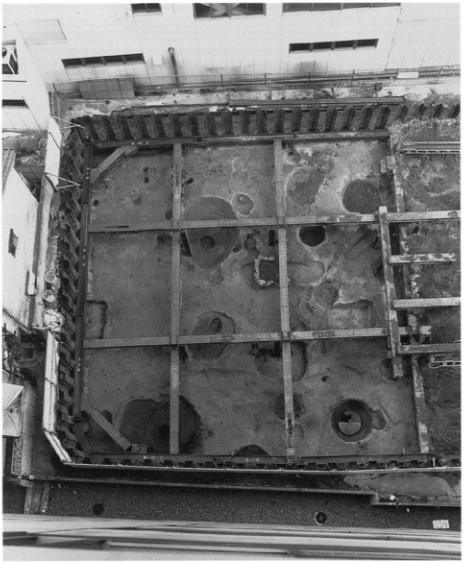
今回の調査で検出された井戸は先述の通り12世紀後半から13世紀前半にかけてのものが主体であるが、桶側とみられる井戸枠を基底部の一方に寄せて据える例が多くみられた。一方、それに先行する11世紀後半から12世紀前半にかけての所謂「白磁単純期」の井戸は井枠を基底部のほぼ中央に据えるものがほとんどで、1150年前後を境に出土陶磁器の様相とともに井戸の構造にも変化が窺われる。

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
SE03			
土師器小皿			
5	8.9	1.2	6.4
6	9.0	1.3	6.8
7	9.1	0.9	7.3
8	9.1	1.0	7.3
9	9.2	1.3	7.2
10	9.4	0.9	7.5
11	9.4	1.0	7.0
土師器杯			
12	14.6	2.4	10.0
SE12			
瓦器小皿			
20	9.8	1.9	8.1
SE22			
土師器小皿			
21	9.5	(1.2)	7.4
SE24			
土師器小皿			
28	7.6	1.1	6.3
土師器杯			
29	12.8	2.6	9.4
30	12.8	2.9	9.0
瓦器椀			
31	(16.8)	5.0	(7.3)
SE25			
土師器杯			
35	12.2	2.8	9.8
SE26			
土師器小皿			
39	8.8	1.1	7.6
土師器杯			
40	15.8	2.7	11.6
SE31			
土師器小皿			
46	9.2	1.3	7.1
土師器杯			
47	15.7	3.4	9.2
SE33			
土師器小皿			
48	8.8	1.0	6.7
SE35			
土師器小皿			
55	8.5	0.9	6.8
56	9.3	1.0	8.6
土師器杯			
57	15.0	3.0	9.5
SE37			
土師器小皿			
60	9.0	1.3	6.9
61	9.5	1.1	8.2
SE43			
土師器小皿			
73	9.0	1.1	6.1
SK09			
土師器小皿			
75	7.4	1.2	5.7
76	7.8	1.3	6.4
77	7.9	1.3	6.2
78	8.0	1.0	6.9
79	8.0	1.2	6.5
80	8.1	1.3	6.2
81	8.2	1.3	6.7
82	8.2	1.5	6.6
83	8.6	1.4	6.9
84	8.7	1.0	6.9
85	7.7	2.2	6.1
土師器杯			
86	11.6	2.9	7.8
87	11.9	2.3	9.0
88	11.9	2.8	8.4
89	12.0	2.7	9.0
90	12.0	3.1	8.9
91	12.1	2.8	7.7
92	12.1	2.8	8.7
93	12.2	2.2	9.0
94	12.2	2.9	7.5
95	12.2	3.1	8.9
96	12.4	2.3	9.1
97	12.4	2.3	9.2
98	12.4	2.4	9.0
99	12.4	2.6	8.9
100	12.4	3.1	7.9
101	12.5	2.8	8.5
102	12.5	2.9	8.4
103	12.7	2.4	8.7
104	12.7	2.9	9.4
105	12.7	3.4	9.9
土師器大皿			
106	18.8	3.5	14.2
SK11			
土師器小皿			
119	8.7	1.0	6.0
SK27			
土師器小皿			
108	9.2	1.2	7.1
109	9.3	1.1	7.4
110	9.4	1.1	7.1
土師器杯			
111	14.8	2.7	9.8
112	16.0	3.4	10.2
瓦器椀			
113	(16.3)	5.3	(6.7)
114	16.4	5.1	6.0
115	16.6	5.1	6.9
116	(17.0)	5.4	7.2
SK32			
土師器小皿			
121	9.2	1.2	7.6
SX06			
瓦器椀			
123	16.4	5.9	7.2

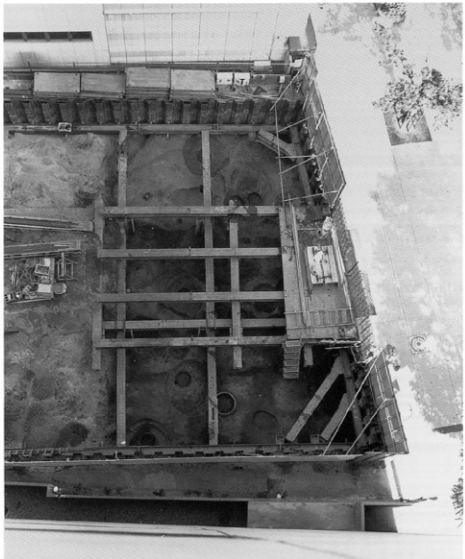
(括弧内の数値は復元値)

第1表　出土土器計測表

図　　版

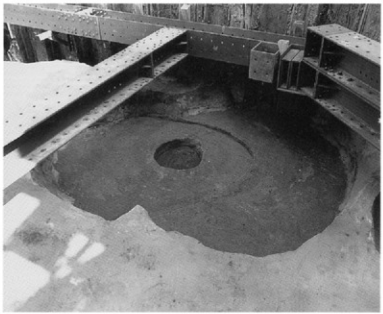


（1）博多遺跡群第86次調査区西半全景（南から）



（2）博多遺跡群第86次調査区東半全景（南東から）

図版2



（1）ＳＥ02・03井戸（西から）

（2）ＳＥ02・03井戸土層（北西から）

（3）ＳＥ04井戸（西から）

（4）ＳＥ04井戸土層（西から）

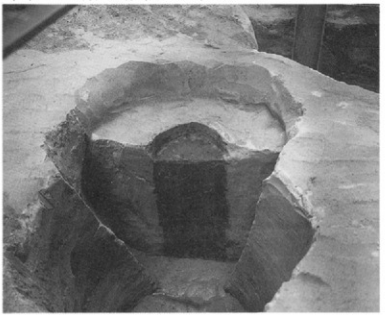
（5）ＳＥ05井戸（南から）

（6）ＳＥ05井戸土層（南東から）

（1）ＳＥ12井戸（南西から）

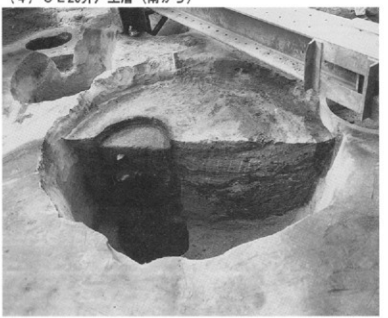
（2）ＳＥ12井戸土層（南西から）

（3）ＳＥ20井戸（南から）



（4）ＳＥ20井戸土層（南から）

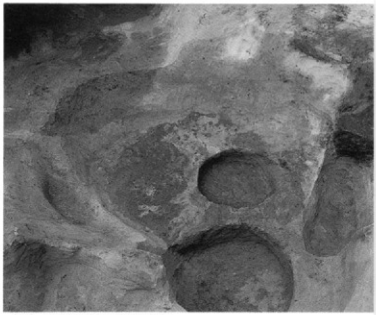
（5）ＳＥ22井戸（南西から）



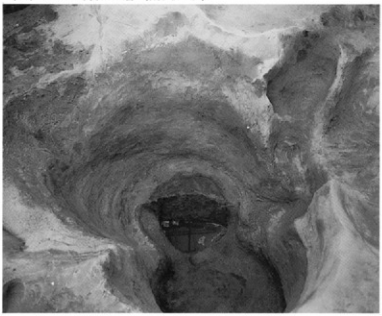
（6）ＳＥ22井戸土層（南から）

図版4

（1）ＳＥ24井戸土層（南西から）



（2）ＳＥ25井戸（西から）

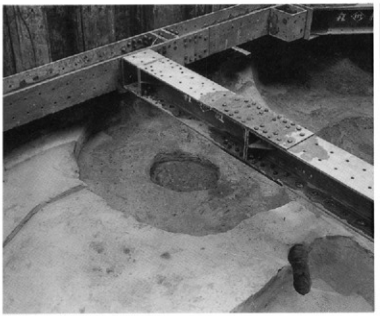


（3）ＳＥ25井戸土層（西から）

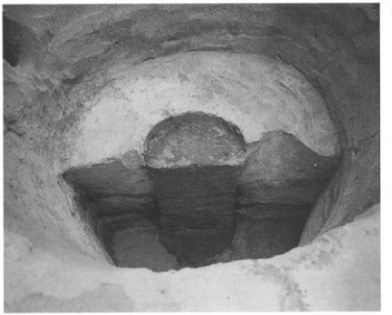
（4）ＳＥ26井戸（北から）

（5）ＳＥ26井戸土層（北東から）

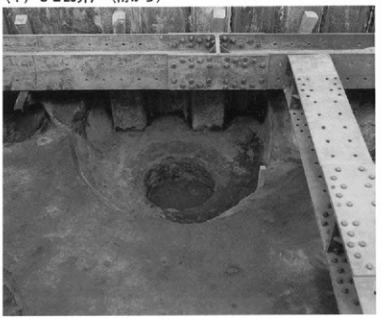
（6）ＳＥ33井戸土層（西から）



（1）ＳＥ29井戸（南から）



（2）ＳＥ29井戸土層（北東から）



（3）ＳＥ31井戸（北西から）

（4）ＳＥ31井戸土層（北西から）

（5）ＳＥ34井戸（南から）

（6）ＳＥ34井戸土層（西から）

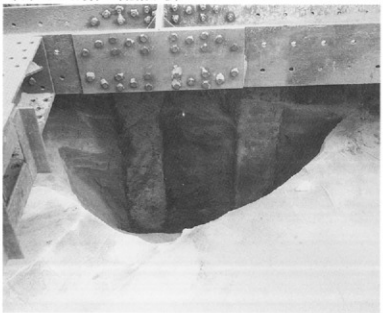
図版6

（1）ＳＥ35井戸（西から）

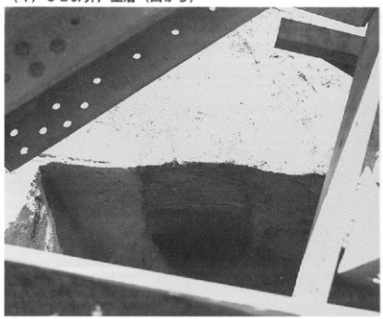
（2）ＳＥ35井戸土層（南西から）

（3）ＳＥ37井戸（北東から）

（4）ＳＥ37井戸土層（西から）



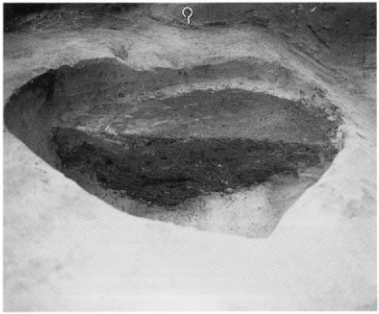
（5）ＳＥ42井戸（南東から）



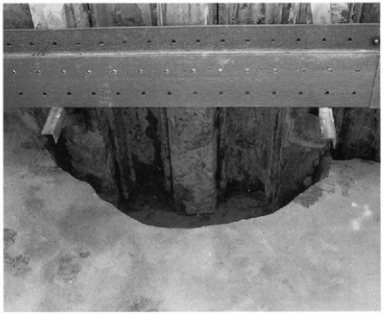
（6）ＳＥ43井戸土層（東から）

（1）ＳＫ09土壙（北東から）

（2）ＳＫ10土壙（南西から）

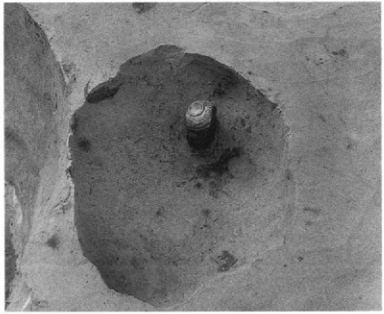


（3）ＳＫ11土壙土層（東から）



（4）ＳＫ14土壙（北西から）

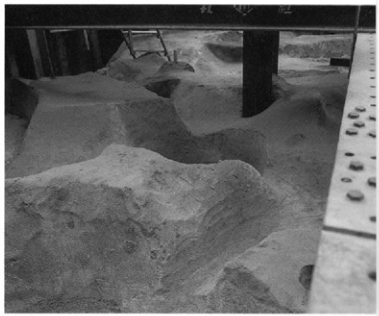
（5）ＳＫ27土壙（南東から）



（6）ＳＸ06土壙（東から）

図版8

（1）ＳＤ44溝土層（北から）

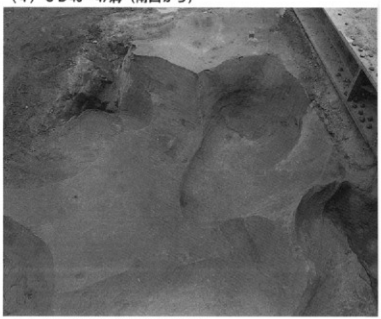


（2）ＳＤ40溝（北から）

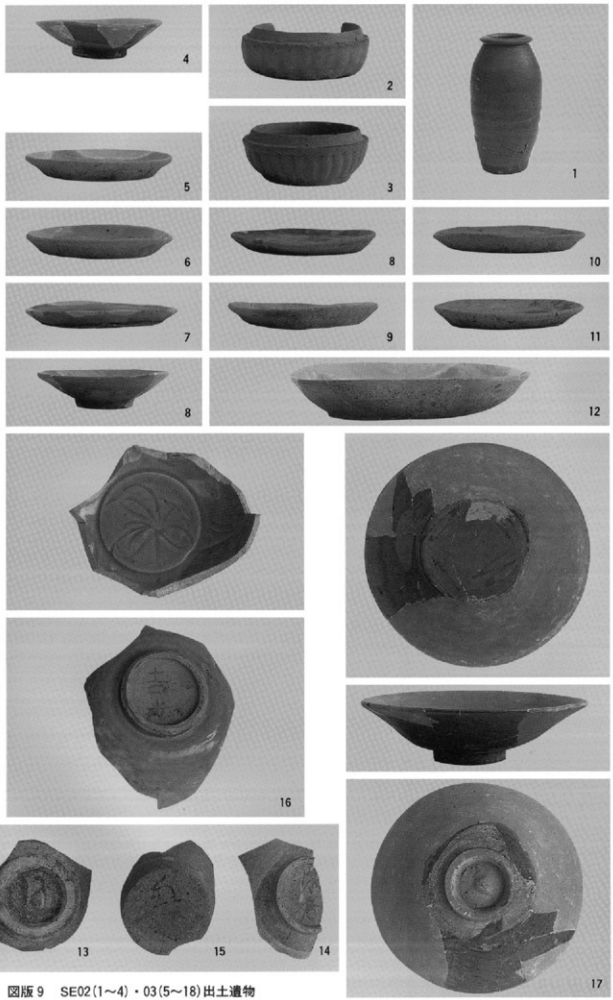
（3）ＳＤ40溝土層（西から）

（4）ＳＤ46・47溝（南西から）

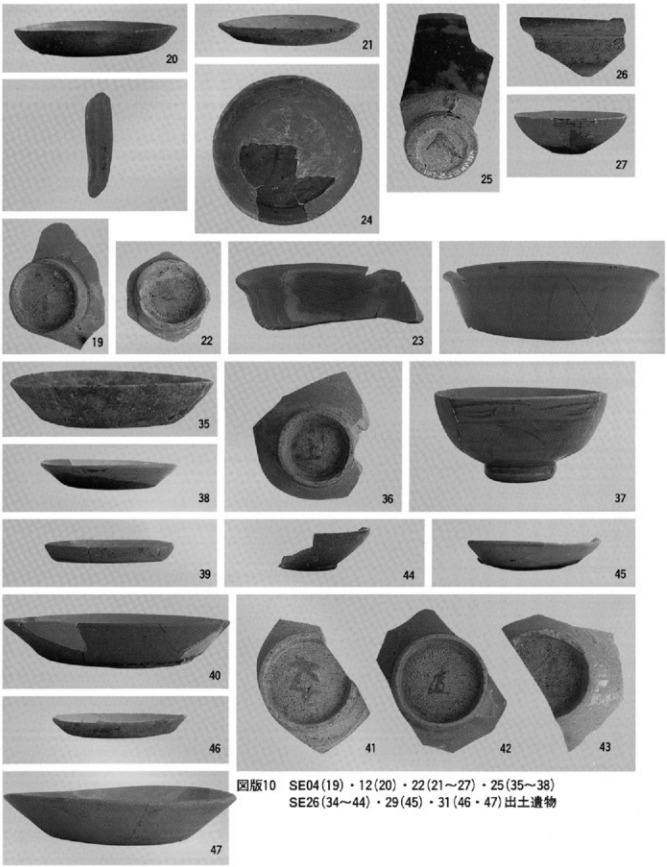
（5）ＳＫ07土壙（南から）



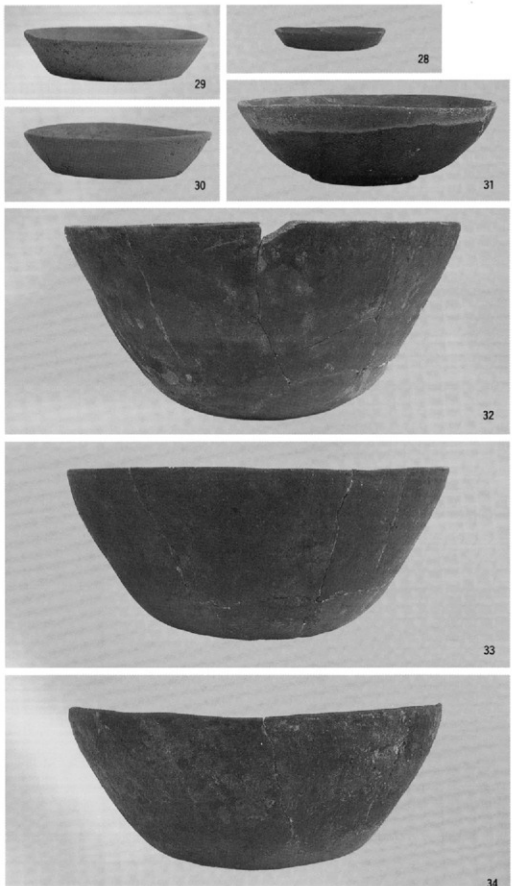
（6）ＳＢ48竪穴住居跡（東から）



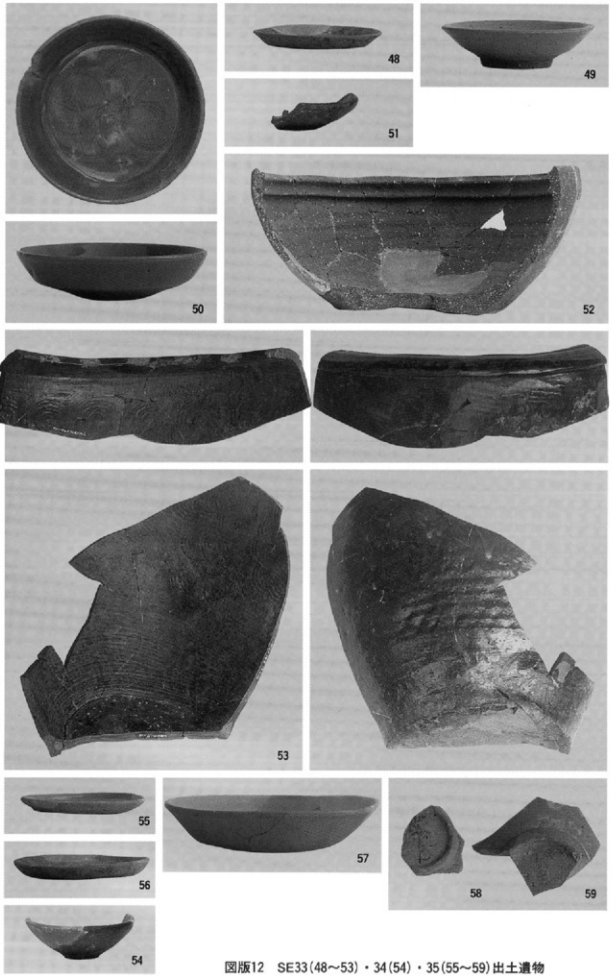
図版9　SE02(1～4)・03(5～18)出土遺物



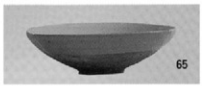
図版10　SE04(19)・12(20)・22(21～27)・25(35～38)
SE26(34～44)・29(45)・31(46・47)出土遺物

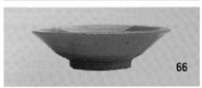


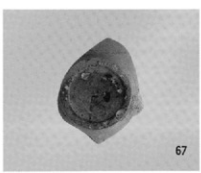
図版11　ＳＥ24出土遺物

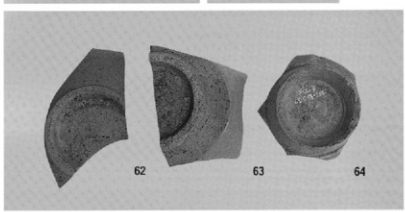


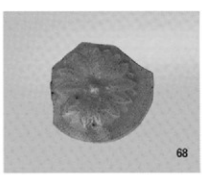
図版12　SE33(48～53)・34(54)・35(55～59)出土遺物



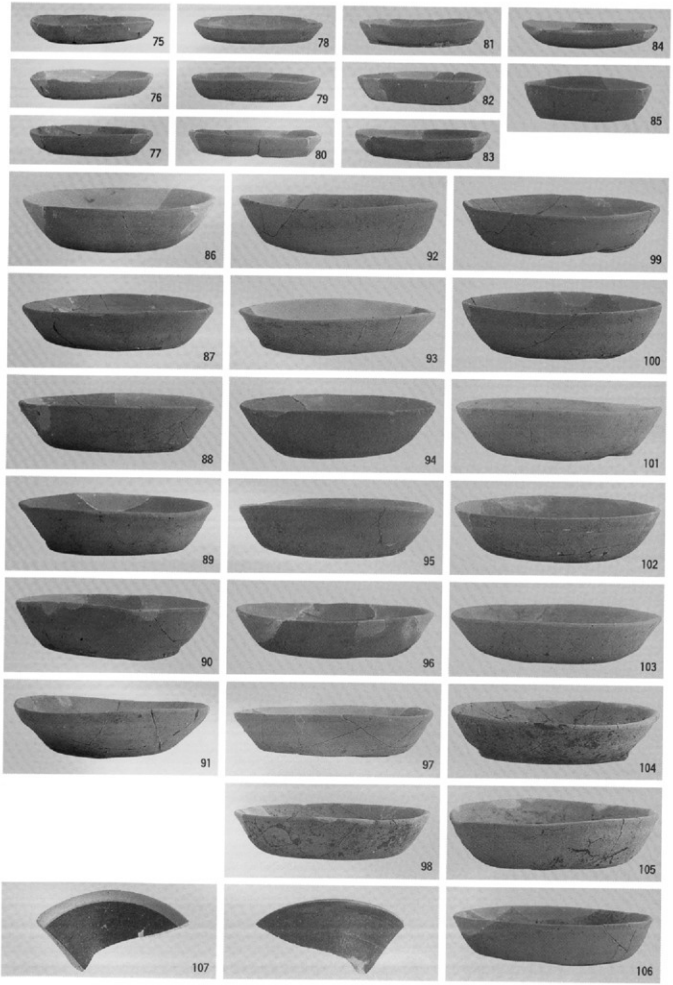








図版13　ＳＥ37出土遺物



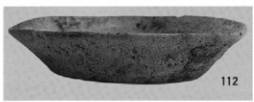
図版14　ＳＫ09出土遺物

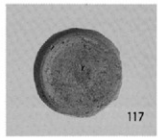
108

109

110

111


112

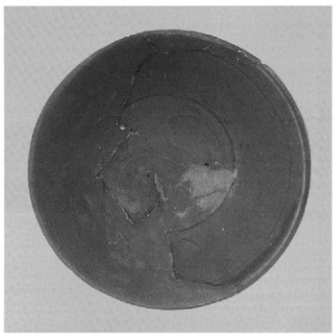

117

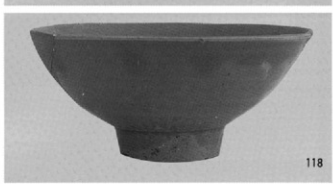
113

114

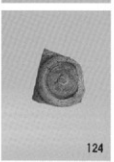
115

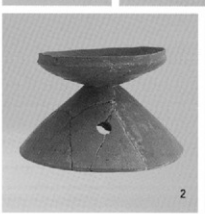
116

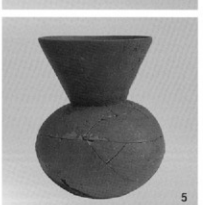



118

図版15　ＳＫ27出土遺物







図版16　ＳＥ43（73・74）・ＳＫ11（119・120）・32（121・122）
ＳＸ06（123）・ＳＤ40（124）・ＳＢ48（1～5）出土遺物

付編―博多遺跡群第33次調査出土遺物―

1997

福岡市教育委員会

例　言

1．本編は福岡市教育委員会が1987年度に実施した博多遺跡群第33次調査の埋蔵文化財調査報告の遺物編で、1988年刊行の「博多11」博多遺跡群第33次調査「福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集」の続編である。

2．本編に掲載した遺構番号はすべて通し番号であり、SC-竪穴住居・SD-溝・SE-井戸・SK-土壙の略号である。

3．本編で用いる貿易陶磁分類は「博多出土貿易陶磁分類表（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ博多(1)福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊1984年）」に拠った。

4．本編に掲載した遺物実測図は、加藤良彦　平川敬治（九州大学）山崎賀代子による。

5．本編に掲載した遺物実測図の製図は山崎による。

6．本編に掲載した遺物写真は加藤による。

7．本編の執筆・編集は加藤が行った。

8．本編に関する遺物・記録類は整理終了後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理される予定であるので活用されたい。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．調査の概要……1
3．弥生時代の遺物……2
4．古墳時代の遺物……2
5．奈良時代の遺物……7
6．平安時代末の遺物……8
7．SD04出土遺物……10
8．その他の遺物……12
9．小結……14

挿　図　目　次

Fig. 1　第2面全体図(1/300)……1
Fig. 2　弥生時代の遺物(1/4)……2
Fig. 3　SK140・SE142出土遺物(1/4)……3
Fig. 4　SK148・SC154出土遺物(1/4)……4
Fig. 5　SK153・SK163出土遺物(1/4・1/3)・4
Fig. 6　古墳時代の遺物(1/4)……6
Fig. 7　SK158出土遺物……7
Fig. 8　奈良時代の遺物……7
Fig. 9　SK009・089・093・127出土遺物(1/4)・9
Fig. 10　SK128出土遺物(1/4)……10
Fig. 11　SD004出土遺物(1/4・1/3)……11
Fig. 12　その他の出土遺物(1/4)……13

1．はじめに

本編は1986年11月25日～11月15日にかけて実施した博多遺跡群第33次調査の埋蔵文化財調査報告の遺物編で、1988年刊行の「博多11」博多遺跡群第33次調査『福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集』の遺物編である。整理作業の体制は以下の通りである。

調査担当：下村悟　加藤良彦

整理作業：池田初実　馬瀬（前田）直子　木村厚子　国武真理子　窪田慧　小城信子　堤滝代
　　楢崎多佳子　西原由規子　能美須賀子

遺物実測：加藤良彦　平川敬治（九州大学）山崎賀代子

写真撮影：加藤良彦

製　　図：山崎賀代子

2．調査の概要

本調査区は博多区祇園町8番に所在し、「博多浜」砂丘の南部、東西方向に走る稜線の南縁斜面に位置する。現地標高で5.21ｍを測る。

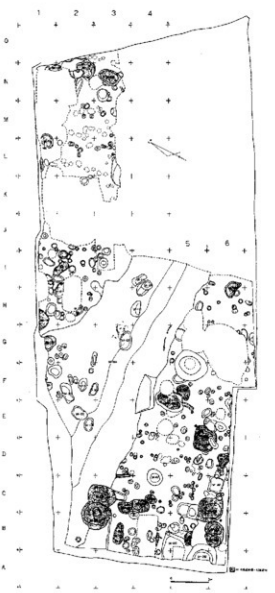


Fig.1　2面全体図（1/300）

調査は近現代の攪乱と近世包含層を除去した、地表下0.7～1ｍ－標高4.0～4.3ｍの第1面・古墳～奈良時代の包含層である暗褐色砂質土上面の標高3.8ｍ前後の第2面（Fig.1）・基盤層である黄白色砂上面の標高3.3～3.5ｍを測る第3面の計3面にわたって実施している。

検出した遺構は、第3面を中心に古墳時代前期布留式併行期の竪穴住居1軒・井戸1基・土壙3基、5世紀代の土壙1基、6世紀後半代の溝1条、7世紀後半代の竪穴住居2軒・土壙1基奈良時代前半代の土壙4基、後半代の土壙4基、平安前期の土壙2基を検出している。

平安時代後期～中世の遺構は第1面を中心に全ての面で検出され、殊に平安末～鎌倉初期の遺構が81基と、全体の約50％を占めており本調査区の最盛期を示している。遺構別では、平安末～鎌倉初期で井戸12基・土壙70基、13世紀前半～14世紀前半で井戸4基・土壙11基、室町時代で土壙2基、戦国期で大溝1条・土壙墓6基・土壙3基を検出している。13世紀前半以降は漸次遺構が減少しており、16世紀代には井戸は1基もなく、かわりに最大幅9.8ｍ深2.7ｍを測る大溝004が東西方向に開削される。半分ほど埋没した頃には内側に土壙墓が営まれ、墓域となっている。

近世では3基の井戸と30基の土壙・埋甕と1条の溝を検出し、近世には再び市街地となっている。

3．弥生時代の遺物（Fig. 2）

今回の調査では弥生時代の遺構は見られなかったが包含層や後世の遺構に混入して若干の遺物が検出される。

1・4は成人用甕棺の口縁部の小片で、周囲の25・32次調査区等に中期の甕棺墓が広がっておりこの撹乱遺物の混入と思われる。1は外傾する厚い平坦口縁の口唇にハケ調整具で刻目を施したもので中期初頭と思われる。SD004出土。4は汲田式の甕棺で平坦口縁の内側が大きく突出し口唇は凹線状に仕上げられる。口縁上面と口唇内側はヨコ板ナデ他はヨコナデ調整である。SK92出土。2は豊前系の甕の口縁で跳上状の口縁下に突帯を1条施す。中期後半。M2SP10出土。3は中期後半の壷の底部で、径2㎝程の焼成後の穿孔があり甑に転用されたものと思われる。包含層出土。5は同期の甕の底部で包含層出土。6は後期後半の瀬戸内系の高杯で、口縁が内傾に短く丸く屈曲する。内外面ともにヨコナデ調整。SK116出土。7は同期の壷の底部で大きなレンズ底を呈する。径10㎝。外面は丁寧なヨコナデ内面はヨコケズリ後ゆるいケンマを施す。包含層出土。

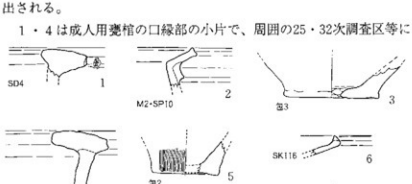


Fig. 2 弥生時代の遺物(1/4)

4．古墳時代の遺物（Fig. 3～6）

古墳時代前期は布留式古段階併行期の竪穴住居1軒・井戸1基・土壙3基を検出している。

SK140(Fig. 3)8は山陰系の二重口縁壷で、口縁がゆるく外湾し屈曲部が突帯状をなす。胴部は倒卵形で尖底気味の丸底を呈する。外面は上位はヨコハケ下位はタテハケを施し肩部上に5本単位の櫛歯による波状文を施す。内面は頸部下をヘラケズリ、頸部は指押圧後ヨコナデを施す。口径17.4器高33㎝を測る。9は布留式系の壷で、中位よりやや上位で肩の張る倒卵形の胴部に頸のしまった長くゆるく外反する口縁部が内面で稜をなさずつづく。口唇は凹線状をなし跳上状になる。胴外面はタテハケ肩部上にカキ目状のヨコハケを施した後5条単位のヘラ刻みを2列施す。下位はタテ板ナデ。内面はケズリ後ケンマ様のナデを施す。口径17㎝。10は小形の鉢で外面縦位のタタキ後ヨコナデを施す。口径11.8器高3.8㎝。

SE142(Fig. 3)11は8同様山陰系の二重口縁壷と思われ肩の張りはなく時期的に降る。肩部に五条単位の櫛描流線を施す。内面は頸部下にケズリ後粗いヨコナデ板ナデを施す。外面下位は煤が付着する。12も山陰系の長口縁壷で口縁はゆるく外反する。胴内面はケズリ。口径10.8㎝。13は畿内系の長口縁の直口小壷で外面はカキ目状のヨコハケ後ヨコケンマ内面はヨコナナメハケ後ヨコナデしタテの暗文を施す。口径15㎝。14は弥生終末期の壷の底部で径4.6㎝のレンズ底を呈する。15は畿内系の小形器台で内外面ともカキ目状のヨコハケ後ヨコケンマ内面体部は放射状の暗文を施す。口径10㎝。16は同様の高杯で外面はナナメハケ後カキ目状ヨコハケをしヨコケンマ内面はカキ目状ヨコハケ後ヨコケンマを施す。口径18㎝。17は庄内式系の甕で外面は細かな左上がりタタキ後疎な幅1㎝のタテハケ内面はタテケズリ後ケンマ様のナデを施す。胴径22㎝。18～21は布留式傾向甕で口縁は内湾せず直線的に外反し胴部外面は全面ハケ調整である。18は完形で口径13.7器高20㎝を測る。外面上位に煤が付着し内面下位には炭化物が付着する。19は内面ケズリ後細いヘラナデ。20は外面黄褐色内面淡赤褐色でケズリは頸部まで及び稜をなす。口径13.4㎝。21は口径16.6㎝で18とともに内面ケズリ後ケンマ様のナデを施す。

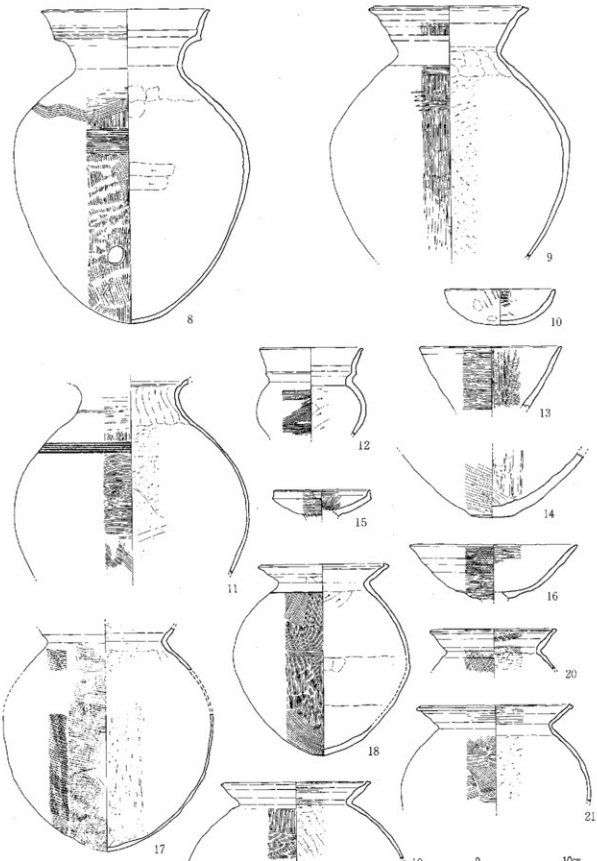


Fig. 3 SK140・SE142出土遺物(1/4)

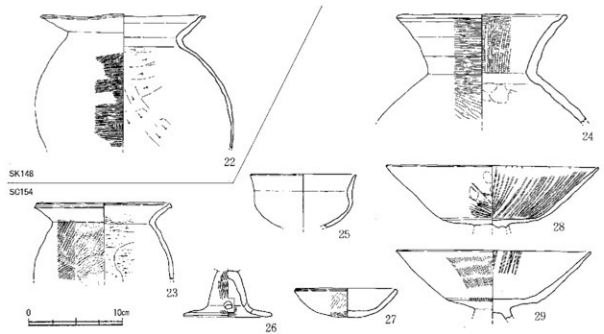


Fig. 4　SK148・SC154出土遺物(1/4)

SK148（Fig. 4）22は布留式傾向甕でひずみが大きく口径16.5～17.2cmを測る。口唇上面は平坦になり沈線を一条施す。外面はヨコハケを主に内面はケズリを施す。

SC154（Fig. 4）23は庄内式と在地長胴甕との折衷様の甕で、口径14.4cm。口唇は凹線状をなし胴外面は細目の右上がりタタキ内面はヨコケズリ後一部ケンマ様のナデを施す。24は畿内系の9と同系統の壷で外面はヨコケンマ内面はヨコハケ後ヨコナデしタテの暗文を施す。口径18.2cm。25は小形丸底壷で口径11.2cm。26は畿内系の短い脚の中位の張る高杯で裾径9.4cm。屈曲部に二ケ所穿孔する。27は皿状の浅い小鉢で口径11cm。口唇に沈線を施し外面はナナメハケ後ヨコナデしゆるくケンマする。28・29は26の高杯の杯部で28は口径22.6、29は口径20.7cm。28は外面にヨコハケ後ヨコナデしヨコケ

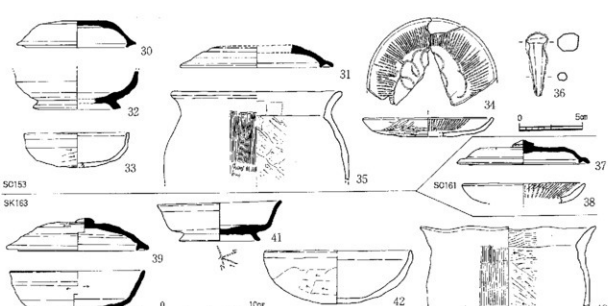


Fig. 5　SK153・SK163出土遺物(1/4・1/3)

ンマ。内面はヨコケンマ後中心から右回りの暗文を施す。29は外面ナナメハケ後ヨコナデしヨコケンマ。内面は28と同様である。

7世紀後半代は掘穴住居2軒・土壙1基を検出している。

SC153（Fig. 5）30は須恵器杯蓋で口径12.5器高2.8㎝を測る。天井部に板圧痕が残りヘラ記号が刻まれる。Ⅳ B期である。31は同じく杯蓋で口径16.2器高2.4㎝。32は高台杯で台径9.3㎝。31とともにⅥ期である。33は土師器杯で口径11器高3.6㎝を測る。外面と上位はヨコナデ下位はヨコケズリ後ゆるくナデる。34は都城系の土師器皿で口径13.8器高２㎝を測る。外面はヨコナデ後多角形のヨコケンマ外底はケズリ後ケンマ内面は見込みに螺線状の、外方に放射状の暗文を施す。35は土師器甕で口径18.2㎝。口縁内面はヨコ板ナデ後ヨコナデ。胴外面は煤が、内面下位に炭化物が付着する。36は鉄製品で太い釘状の製品で頭部は16×14㎜の８角形で体部は６角形を呈する。全長41㎜を測る。

SC161（Fig. 5）37は須恵器杯蓋でⅥ期。口径14器高2.5㎝。天井部は右回転のヘラケズリを施す。38は径13㎝の土師器の都城系の皿で内面はヨコナデ後線状のタテ暗文と口縁部にこれを切るナナメ暗文を施す。

SK163（Fig. 5）39～41は須恵器で、39は杯蓋。口径15㎝器高2.4㎝を測る。天井部は右回転ケズリ。40は高台杯で口径14.2器高5㎝。体部内外面は右回転ナデである。41も高台杯で40よりは杯身が薄く角張る。内外面は右回転ナデを施す。外底にヘラ記号がある。42は土師器杯でゆるく内湾する口縁で口径15.6器高5.6㎝を測る。外面上位はヨコナデ下位はヨコケズリ後ヨコナデを施す。43は土師器甕で粗い造作で口縁が波打つ。口径18.5㎝で頸部のくびれは弱い。口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ、炭化物が付着する。外面は煤が付着して淡桃色を呈し二次焼成が著しい。

その他の遺物（Fig. 6）44は畿内系の壷で、外面の粘土接合部が稜をなす二重口縁を呈する。外面は粗いヨコナデ内面はヨコケズリ後粗いヨコナデ。口径18㎝。45は布留式傾向甕で外面はヨコハケ後ヨコナデしハケ調整具の小口で肩部に波状文を施す。胴内面は頸部までケズリ後下半をナデる。46・47も同期の小形器台で、46は口径8.7㎝47は８㎝でともに内面に放射状の暗文を施す。48はⅢ b期の須恵器杯で受部径13.2器高3.9㎝、49はⅣ期の杯で受部径11器高3.3㎝。50～55はⅥ期の須恵器。50は杯蓋で口径14.8器高2.6㎝。つまみの痕跡がある。51は口径13.6器高1.6㎝。52・53は高台杯で52は台径９㎝、53は同10㎝。54は杯で口径12.5㎝。55は皿で口径19.8器高2.9㎝。56はⅣ期の壷で口径14.2㎝。57は大甕の口縁で外面に３段の波状文を施す。58～60は都城系の土師器。58は内面に羽状の暗文を施し口径16.2㎝。59は皿で口径17.2器高2.9㎝。明赤褐色で胎土は精良、口縁は58と共通し内側に折れ込む。60は把手付盤。61～63は半島系陶質土器で61は甕の胴部小片。外面は若干粗い木目直交縦位のタタキ後上端４条が深い幅1.2㎝のヨコカキ目。内面は外面より太い平行弧の当具痕を丁寧にナデ消す。内外とも淡灰色で胎土は精良。62も甕の小片で擬格子タタキ後赤色顔料を塗布し回転ナデを施す。内面にも擬格子の圧痕が残りこれをヨコにナデる。外面暗赤色内面は淡黄灰色で砂粒を若干含む。63は瓦質の甕で木目平行横位のタタキを施し上位を回転ナデ、内面は平行弧線の当具痕をナデ消す。内外とも黒灰色で若干の砂粒を含む。64は新羅焼の長頸壺で胴径17頸径7.7㎝を測る。外面は回転ナデ後胴部に２条の平行沈線を施し、この上下に径１㎝で上端２㎜を欠きその上端中央に刺突点のある同心円風のスタンプを施し、沈線間に17×９㎜の二角内に３本の放射線のあるスタンプを連続して施す。上位は自然釉がかかり暗緑灰色を呈する。内面は暗灰色で断面は紫灰色を呈する。胎土は砂粒を若干含む。65～69は埴輪で28次・31次調査で検出された博多１号墳に伴うものと思われる。65と69は形象埴輪で家形の可能性がある。65は厚さ９㎜程の平坦な破片で外面にタテハケ後、中央に１条沈線を施しこの上下に右向きの羽状に沈線を施した後、左向きの羽状の沈線を施しており、この沈線に沿って

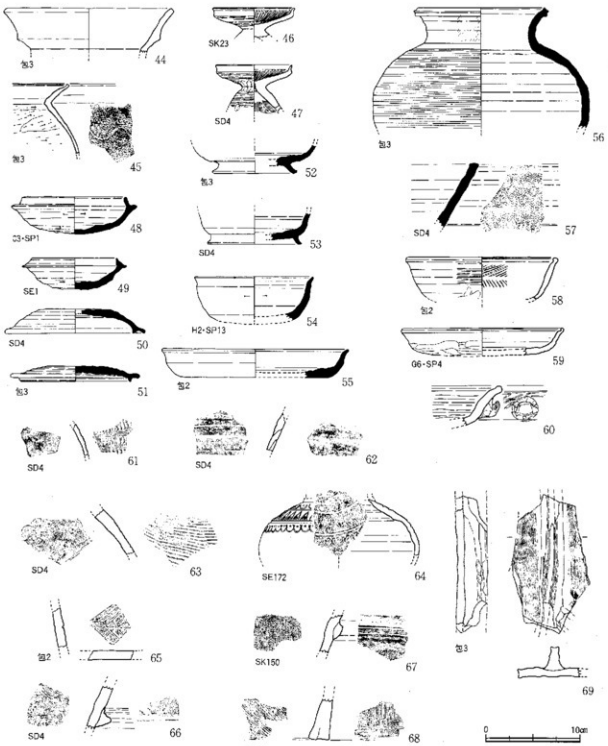


Fig. 6　古墳時代の遺物(1/4)

四周が割れている。施文後赤色顔料を塗布している。69も同じ厚みの板状で14.5×7.7㎝を測る。外面にタテハケ後縦方向に高さ2㎝強の帯を貼付し、下端は右下に分岐する。66～68は円筒埴輪で、66・67は外反の度合いが大きく朝顔形の突帯部と思われる。66は外面タテハケ後赤色顔料塗布、内面は上位にナナメ下位にタテハケを施す。67は外面にタテハケ内面に粗いタテハケを施す。68は裾部で外面はタテハケ後下端にヨコハケ内面は粗いナナメハケを施す。

5．奈良時代の遺物（Fig. 7・8）

奈良時代は前半代の土壙4基・後半代の土壙4基を検出している。平安末～鎌倉初に次ぐ遺構の量で包含層中においても遺物が目立つ。

SK158（Fig. 7） 70・71は須恵器杯蓋で70は口径14.7㎝を測る。天井部は右回転ケズリで宝珠つまみの痕跡がある。71は口径15㎝で内面は回転ナデ後ヨコにナデる。72・73は須恵器高台杯で、72は台径8.4㎝。焼成は若干ゆるい。73は台径9.2㎝で外底に平行線のヘラ記号を有する。

その他の遺物（Fig. 8）74～77は高台杯で、74は口径11.6器高4.8㎝。75は腰が稜をなして屈曲し口縁が直線的に外反するもので口径10.1器高4.1㎝を測る。76は口径12.8器高4.8㎝で高台畳付を凹線気味に仕上げる。77は口径11.6器高5.2㎝で外面に3条の浅い沈線を施す。全て回転ナデ後内底をタテにナデる。75が8世紀後半、他は前半代である。78・79は土師器のやや大形の高台杯で78は口径15.7器高9.7㎝。79は口径17.6器高4.3㎝で、ともに体部は回転ナデ後ゆるい回転ケンマ、外底はヘラ切りである。8世紀前半。80～82は須恵器杯蓋で、80は口径16.7器高3.1㎝。天井部は右回転ケズリ。8世紀前半。81は口径16.4㎝の偏平な体部で天井部右回転ケズリでつまみの痕跡が残る。8世紀後半。82は口径16.2器高0.9㎝のほとんど板状の体部で口唇に沈線を施す。9世紀初頭。83は須恵器の盤で口径26.4器高4.1㎝を測る。高台畳付は凹線様に仕上げる。8世紀前半。84は小形の平瓶で肩が稜をなして屈曲し、径13㎝を測る。外面下位は回転ケズリ後ゆるい回転ナデを施す。8世紀前半。85・86は土師器の盤で85は口径23.9器高1.7㎝。86は高台を有し口径23.4器高2.2㎝で、ともに回転ナデ後回転ケンマを施す。8世紀前半。87～89は玄海灘式の土師器甕で、88は木日直交横位の平行タタキ89は縦位の平行タタキで内面は平行弧線当具痕をナデる。90は焼塩壷で径7.8㎝。平織布圧痕が残る。

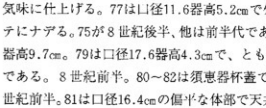


Fig. 7 SK158出土遺物(1/4)

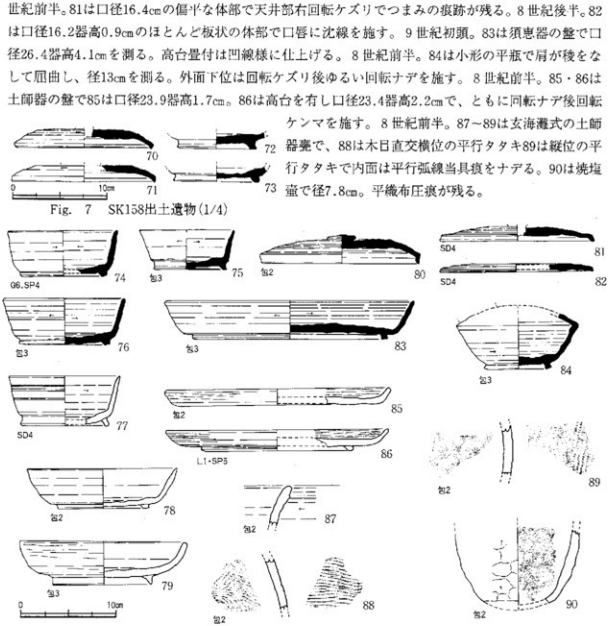


Fig. 8 奈良時代の遺物(1/4)

6．平安時代末の遺物

今回の調査で中心をなす時期で、井戸12基・土壙70基を検出し、全遺構の約50％を占める。

SK９（Fig. ９） 91はⅣ類の白磁碗で口径15㎝。釉は灰白色で厚く氷裂が入る。外面にピンホールが目立つ。92は白磁平底皿Ⅲ類で口径9.4器高3.1㎝釉はオリーブ黄色で外面中位まで施釉。93は土師器皿で口径９器高1.2㎝。外底は回転糸切り。12世紀中頃～末。

SK89（Fig. ９） 94は龍泉窯青磁碗で口径16.6㎝。釉はオリーブ色で透明。外面口縁下に沈線を１条施し内面には櫛描と片切彫で水波文を描く。12世紀中頃～13世紀初。

SK93（Fig. ９） 95・96は白磁Ⅳ類の玉縁の碗で、95は口径16器高6.9㎝。釉は明オリーブ灰色。腰の稜線が目立つ。内面に圏線を１条施す。96は口径16.8器高6.8㎝。釉は灰白色。内面に圏線を施す。97はⅨ類の白磁碗で口径17.4器高6.6㎝。釉は黄灰白色でピンホールが目立つ。見込みには蛇ノ目のカキ取りを施す。98はⅥ類の白磁碗で口径17.0㎝。口縁内側に沈線を１条、以下に櫛描文を施す。99は高麗青磁の碗で高台径７㎝。釉は緑灰色で全面に施し畳付をカキ取る。見込みに５ケ所長方形の胎土目を残す。外底は回転ケズリで兜巾状をなす。100は白磁Ⅶ類の碗で高台径6.5㎝。釉は淡いオリーブ色で見込みに蛇ノ目カキ取りを施す。101はⅤ類の碗で高い高台をもち径6.6㎝を測る。釉は浅黄色で厚く高台脇までかかる。内面には圏線と櫛描文を施す。102・104・105は白磁高台付皿Ⅰ類で102は口径13器高4.2㎝を測る。釉は灰白色で高台脇まで施す。104は口径10.6器高2.6㎝。釉は明オリーブ灰で高台際まで施す。見込みは蛇ノ目にカキ取る。105は口径10.5器高2.5㎝で釉は明青灰色。高台脇まで施し見込みは蛇ノ目にカキ取る。103は白磁平底皿Ⅱ類で口径11器高2.8㎝。釉は淡黄色で外面中位まで施す。106は白磁碗で、高台内憫を段状に削る。釉は灰白色で体部下位まで掛け見込みは蛇ノ目にカキ取る。107は龍泉窯系の青磁平底皿で口径11.4器高3.3㎝。釉は灰オリーブで氷裂が多く入り外底際まで施す。見込みの圏線内に櫛描と片切彫で花文を施す。108は青磁の盤口小壺で胴部に片切彫の蓮弁を施す。釉はオリーブ灰で全面に施す。口径７㎝。香炉の可能性もある。109は準Ａ群陶器四耳壺で口径11.7㎝。釉はオリーブ釉を褐釉上に流し掛ける。110はＡ群の注口付の行平で口径15㎝。釉はオリーブ色で口縁内面から外面に掛ける。112もＡ群の鉢で口径20.8㎝。内面は灰黄褐色で口縁上面から外面にオリーブ色の釉を掛ける。113～116は土師器杯で、113は口径15.6器高3.2㎝・114は口径15.2器高3.4㎝・115は口径16.2器高2.9㎝・116は口径15.6器高3.2㎝を測る。調整は全て回転ナデ後内底をタテナデ、外底は回転糸切りで114・115には板圧痕が残る。117・118は土師器小皿で117は口径8.8器高0.9㎝・118は口径8.8器高1.2㎝で調整は杯と同様である。12世紀後半～末。

SK127（Fig. ９） 119は白磁Ⅵ類の碗で口径14.6器高4.8㎝。釉は灰白色で高台脇まで施す。内面は１条の沈線下に櫛描文を施す。120は青磁碗で口径17.5㎝。外面は２条の沈線下に片切彫の粗い櫛歯様の文様を施し内面には１条の沈線下に粗い櫛描文を施す。釉はオリーブ黄色で氷裂が入り、外面下位まで施す。121は常滑焼Ⅰ期の甕で口径約50㎝前後と思われる。口唇内面は低い段をなし、頸部にはヨコ板ナデ痕が残る。褐釉上に口縁内面と頸部外面に自然釉が掛かりオリーブ灰色を呈する。口縁内面には砂敷きの白色砂礫が焼き付く。122は瓦質土器の擂鉢の底部片。胎土は砂粒を多く含み明黄褐色を呈し、内外面は黒灰色を呈する。内面は５本単位の擂目を施し表面が摩耗する。外面は指押圧後ナデ・タテハケを施す。123・124は土師器杯で、123は口径14.3器高2.8㎝・124は口径14.8器高3.1㎝を測る。両方とも内外面に回転ナデ後内底をタテにナデる。外底は回転糸切後板圧痕が残る。125・126は土師器皿で125は口径８器高1.8㎝・126は口径9.1器高１㎝。外底は回転糸切り。125は14世紀代の混入。12世紀後半～13世紀初。

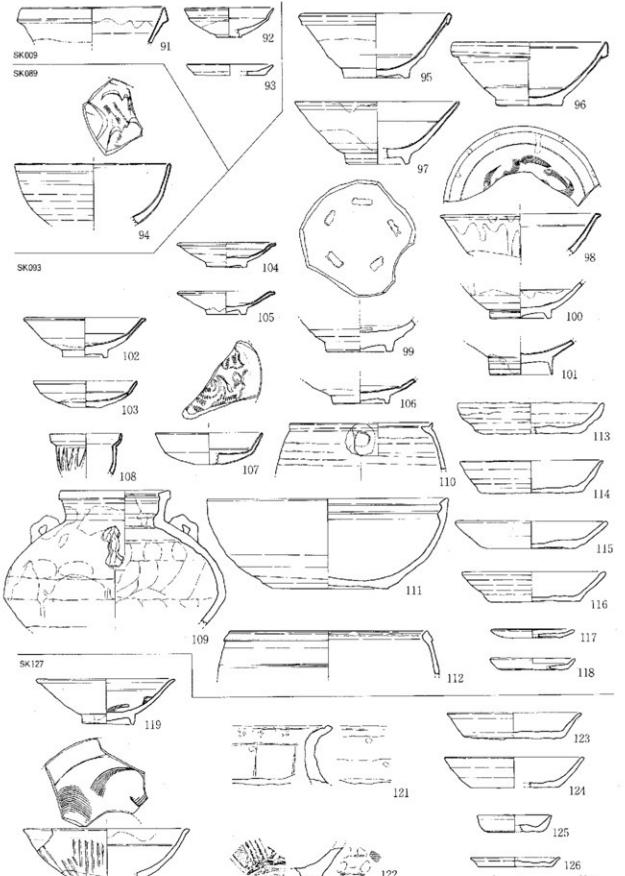


Fig. 9 SK009·089·093·127出土遺物(1/4)

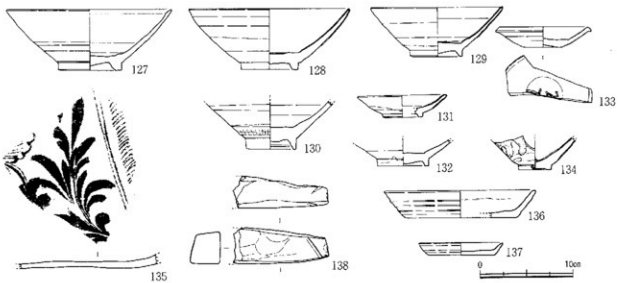


Fig. 10 SK128出土遺物(1/4)

SK128 (Fig. 10) 127～130は白磁碗で127は口径17.4器高6.5cm。釉は明オリーブ灰色で体部外面中位まで施し、見込みは蛇ノ目にカキ取る。Ⅸ類。128も同様で、口径17器高6.4cm。釉は灰白色で体外面中位まで施し見込みは蛇ノ目にカキ取る。129もⅨ類で口径14.1器高5.3cmで小振りである。釉は灰色で体外面下位まで施す。見込みは蛇ノ目にカキ取る。132はⅨ類に似るが見込みのカキ取りはない。釉は淡黄色で細かな貫入が入り高台脇までかける。130もⅨ類に似るが、見込みは小さく体部はさらに直線的になる。釉はオリーブ色で厚く氷裂が入り体外面下位まで施す。見込みのカキ取りはない。131は白磁高台付皿Ⅱ類で口径9.5器高2.3cmを測る。釉は明オリーブ灰色で体外面下位まで施し見込みは蛇ノ目にカキ取る。133は白磁平底皿Ⅴ類で口径10器高2.2cm。釉は灰色で底部際まで施す。外底に墨書がある。134は建窯の天目茶碗で高台径3.5cm。体外面下位まで褐釉の上に黒色不透明釉が厚く垂れかかる。135はA群陶器の黄釉盤の底部で内面に淡黄灰色の化粧土を施し鉄絵で草花文を描く。釉はにぶい黄色の透明釉である。胎土は淡黄色で1～2㎜の砂粒を多量に含む。136は土師器杯で口径16.1器高2.9cmで回転ナデ後内底にタテナデを施し外底は回転糸切り後板圧痕が残る。137は土師器皿で口径8.9器高1.3cm。調整は杯と同様。138は角柱状の土製品で断面で3.4×3.2cmを測る。先端が2×1.7cmと細くなり、タテケズリ後ナデを施す。胎土は2～3㎜の石英粒を多く含み浅黄橙色を呈し、外面は二次焼成で褐灰色を呈する。支脚か。12世紀後半～末。

7. SD004 出土遺物 (Fig. 11)

SD004は調査区の中央を東西に貫く最大幅約10mの大溝で16世紀前半に開削され半分程埋没した段階で墓域とされ、後半代に再度改削されている。

139～147は4層の出土遺物。139は端返りの白磁皿で口径14器高2.2cm。釉は灰白色で全面施釉後畳付のみカキ取る。140は白磁の碗で灰白色の釉を厚く全面に施釉後畳付のみカキ取る。141・142は李朝の粉青の碗で、141は外底を螺旋状に削り全面に灰白色の不透明釉を掛ける。畳付には4ケ所胎土目が残る。142は腰折れで灰青色の不透明釉を全面施した後畳付の釉をふき取り、胎土目が残る。143は李朝三島手の象嵌の碗である。144は備前Ⅴ期の大甕の口縁小片、145・146は瓦質の火舎で145は外面に蓮弁のスタンプを、146は刻目突帯を施す。147は土師器杯で口径10底径5.5器高2.8cmを測る。外底は糸切り。148は138と同様の楕円柱の土製品で5×3.2cmを測る。胎土は細かな砂粒を多量に含み

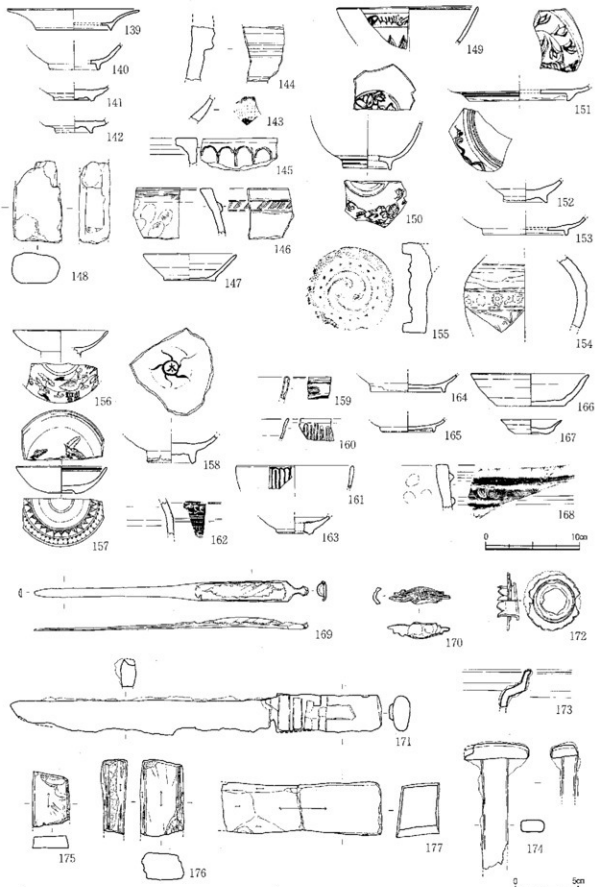


Fig. 11 SD004出土遺物(1/4・1/3)

にぶい橙色を呈する。外面はいぶした二次焼成で灰黄色を呈する。

149～155は３層出土。149～151は明青花で、149は碗で口径15.2㎝。口縁外面に波濤文胴部に芭蕉葉文を施す。150は饅頭小形の碗で外面に牡丹唐草文見込みに梅月文を施す。高台径5.2㎝で畳付のみ露胎。151は皿で外面に唐草文見込みに花卉文を施す。全面施釉後畳付のみカキ取る。高台径10.6㎝。152は李朝粉青碗で全面に灰白～ベージュ色の釉を全面に施釉する。見込に目痕が残る。153は白磁の皿で高台径9㎝。全面施釉後畳付のみカキ取る。154は李朝象嵌の壷で胴径13㎝。花文のスタンプ等に象嵌後外面のみに青みがかった透明釉を施す。155は三巴文の軒丸瓦で径9.3㎝と小振りである。珠文は18点施す。

156～168は１・２層出土遺物。156は明末・清初の青花皿で口径10㎝。外面に「福」字と宝相華唐草文を施す。157は蚕卵底の明青花皿で口径9.9器高2.8㎝を測る。外面に芭蕉葉文・見込みにねじ花を施す。釉は全面施釉後畳付部をカキ取る。158～160は龍泉窯系の青磁碗で158は高台径5.2㎝。釉は青灰オリーブで氷裂が入り高台際まで施す。見込みに「太」字をデザインしたスタンプ文がある。159は雷文帯を施す碗で釉は青緑色で厚く氷裂が入る。160はヘラ描きの菊弁状の沈線を施す青磁碗で器壁が薄く、釉は淡灰オリーブで透明。口縁端が反り気味になる。161は龍泉窯系の細蓮弁文の碗で口径12.4㎝。釉はオリーブ色で氷裂が入る。162は李朝象嵌青磁の瓶で菊花のスタンプ等の象嵌を施した後淡緑灰色の釉を全面に施す。163は同じく粉青の碗で高台径４㎝。全面に灰白色の釉を施し見込みに胎土目が残る。164は翡翠釉の皿で底径８㎝。釉は高台際までかかりコバルトブルーを呈するが二次火熱を受け変色する。165は白磁の皿で灰白色釉を全面施釉後畳付のみカキ取る。166は土師器杯で口径12.6底径7.6器高3.3㎝を測る。回転ナデ後内底をタテナデ外底は回転糸切り後板圧痕が残る。167は土師器小皿で口径6.4器高1.5㎝を測り外底は回転糸切り、168は瓦質の火舎で外面２条の突帯間にスタンプ文を施す。

169は１層客土中で検出した小刀の茎で銅製。全長21.4幅1.6㎝を測る。上面の窓内に譲葉形の飾金具を鋲で留めている。170は同じ小刀の目釘隠しの飾金具で銅に鍍金している。水波に桐をデザインしている。171は小刀の下位に接して出土した唐通しで全長30㎝。刃渡り21㎝。柄には蔓巻の飾と目釘隠しの銅金具がある。173は盤口の鉄鍋の口縁部で径40～50㎝。厚さが約５㎜と厚く鋳鉄製と思われる。174は舟釘で頭部断面で5.1×2.1㎝、体部で1.9×１㎝を測り、体部には木質が銹着する。172は銅製の菊座飾金具で径48㎜。留金具で外径33内径30㎜長さ17㎜を測る。端部は剣頭状でこれを折曲げて留めている。175は淡赤褐色の凝灰質砂岩の仕上げ砥石で幅28厚10㎜を測る。両側には鋸による切り出し痕が残る。176は弥生時代の擦切り技法の石剣を転用したと思われる砥石で暗灰色の頁岩。四隅に擦切溝が残る。幅33厚20㎜を測る。177は粗砂岩製の角柱状の荒砥石で幅41厚34㎜。端部は叩打で平坦に整形し４面を砥ぎに用いる。中央が２～４㎜凹む。

８．その他の遺物（Fig. 12）

178～191はSD004出土のA群陶器の磁灶窯系の黄釉盤の口縁部のバリエーションで、口縁破片のみで119片検出しており量的に日立つ資料である。小片は鉢の資料も紛れている可能性も高いが、178～183は錫口縁のタイプ184～191は折返しの玉縁口縁のタイプである。178・179は屈曲した口縁が外反するものでこれが戻いもの（178：A1）短いもの（179：A2）・上面が平坦で端部が垂下するものでこれの大（180：B1）・中（181：B2）：小（183：B3）・端部折返し口縁で、断面が小さな横長四角で端部が内側に張り若干垂下するもの（184：C1）・張り垂下が退化したもの（185：C2）・正方形となり突帯化したもの（186：C3）・断面が隅丸方形で大きなもの（187：D）・縦長四角で上面が凹線気味で内傾しこれのおおきなもの（188：E1）・小さなもの（189：E2）・断面が横楕円で内傾

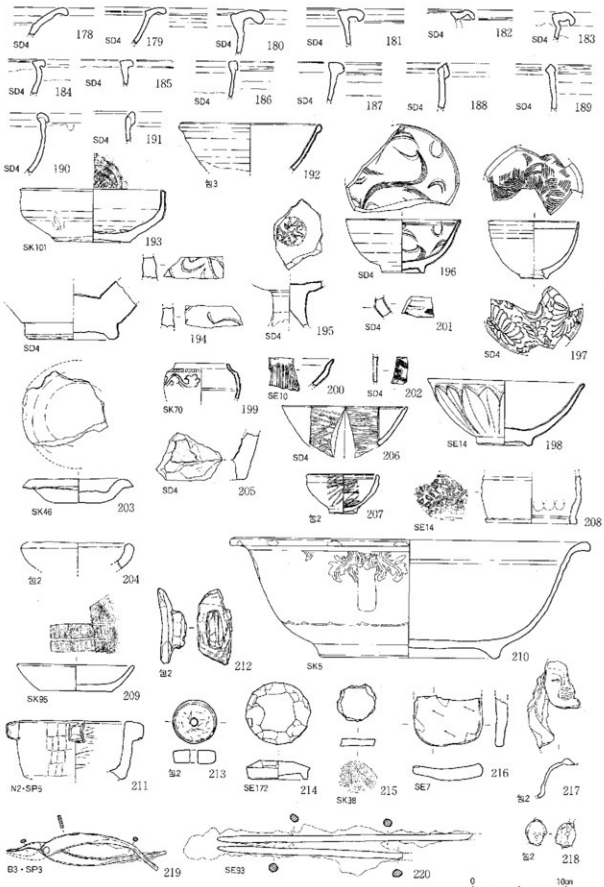


Fig. 12 その他の出土遺物(1/4)

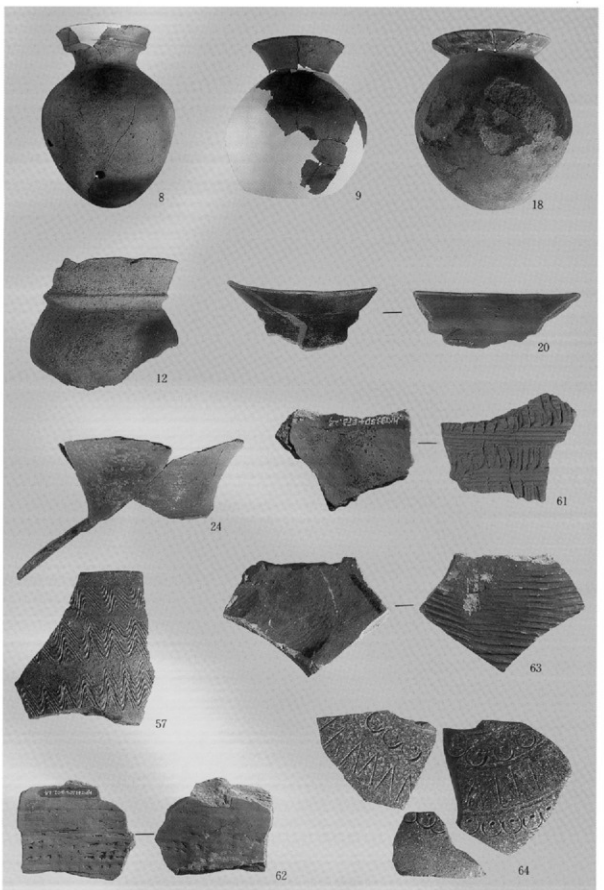
に張り出すもの(190：F)・断面継楕円で内側に張りがなく上端が稜線気味なもの(191：G)とに細分した。

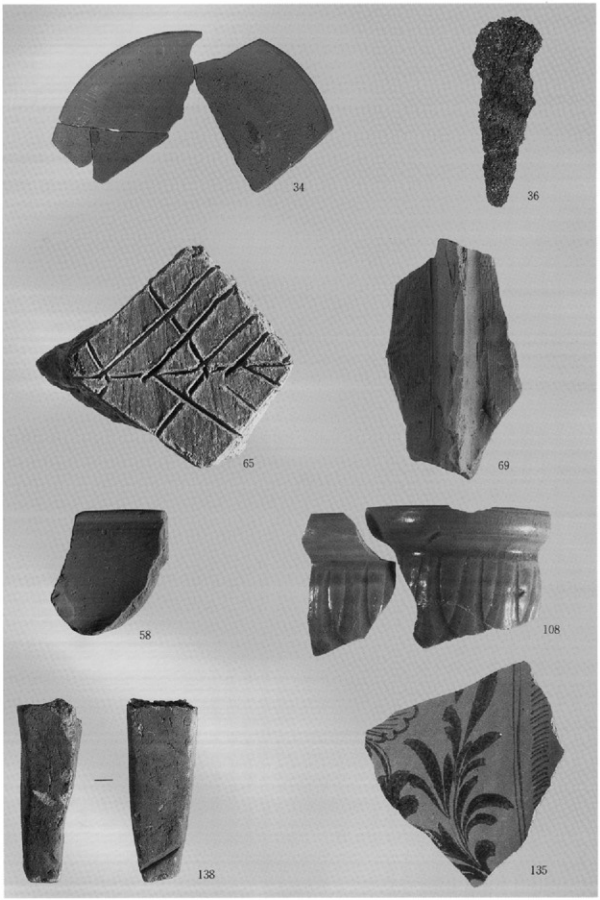
192は白磁Ⅱ類の碗で口径15.1㎝。釉は乳灰色で体外面下位まで施す。193は青磁鉢で口径15.4器高5.5㎝を測る。釉はオリーブグリーンの透明で貫入が入り内外の中上位まで施す。見込みにヘラ描の人名らしき文字がる。胎土は淡黄灰色と呈し砂粒を少量含む。見込みと畳付に赤褐色の目痕が残る。越州窯系か。194は青白磁の梅瓶で底部が厚く3㎝を測る。体部には片切彫の渦文を施す。外底は露胎。195は青磁の高足坏で見込みに牡丹の印花を施す。釉は淡オリーブで厚く掛ける。196は高麗青磁の碗で口径12.2器高5.6㎝を測る。内面口縁下の2条の沈線以下に櫛描と片切彫で草文を施す。釉は透明なオリーブ灰色で厚く水裂が入る。全面に施釉し外底を丸鑿でタテに削る。197も高麗青磁の小碗で口径9.6器高6㎝を測る。口縁外面に2条の回線を施し以下に毛彫の蓮華唐草文を施す。内面は1条の沈線下に櫛描文を施す。釉は灰オリーブで貫入が入り全面に施す。198は龍泉窯系Ⅱ類の鎬入複弁の蓮弁文碗で口径16.4器高6.8㎝と測る。釉は一部高台内まで掛かる。199は青白磁の袋台子で全面施釉後口唇をカキ取る。200は建窯の天目碗で黒褐釉を施釉後内面に生漆か樹脂で条線文を施す。201は釉裏紅大壺の頸部の小片で器壁が厚く1.2㎝を測る。外面は沈線下に酸化銅を呈色材とした顔料を塗布し暗赤色に発色し一部黒～緑色の虹彩状の発色がある。全面に空色の透明釉を全面にかける。胎土は灰白色で細かな気泡が目立つ。遺跡群内で2例目の検出である。202は青花皿で見込みに羯磨文風の縁取文様を施し呉須は暗青～深藍色に発色する。釉は青味を負びた灰白色。元様式と思われる。203はガラス塊で坩堝内で冷え固まったもので径11.5深さ2.6㎝を測る。表面の大半は銀化し縁黄色を呈し新しい破断面は紅彩を放っている。内面は透明なオリーブグリーンを呈する。近世遺構からの検出であるが、205の様に陶器C群の内面に同様に銀化した坩堝があり、12世紀中～後半代の所産と思われる。204も坩堝で径12㎝で内外面は熔融してガラス化しており深緑～暗赤色を呈し鋳銅に用いられている。206・207は楠葉型の瓦器塊。207は小塊で径7.6器高4.1㎝を測る。208は土師質の壺でヘラによる花鳥文を施す。209は卸皿風の土師皿でヘラで格子状に沈線を刻む。210はイギリス産の銅版転写染付軟質磁器の盤で外底に窯印を銅版転写する。神戸市立博物館の岡泰正氏に鑑定を御願いし、イギリスのＨＡＮＬＥＹ・Ltd（1899～1913年操業）製の1913年製の窯印であるとの回答を得た。口径38器高12.5㎝を測る。211は滑石石鍋213は同砥錘車。214.215は瓦玉で214は白磁碗・215は土師皿製。216は須恵質甕片を整形した陶硯で四周を研いでいる。217は包含層2層出土の布袋像で型成形の土師質で隣接する86次調査でも出土している。11～13世紀代。218も同様の婦人像で髷を結っている。2層出土。ともに中国製と思われる。219は鉗子で全長16.7㎝22.0は鉄箸で全長25.8㎝。ともに中世の産である。鉄滓は8世紀前半期を最古に、12世紀後半と近世をピークに各時期の遺構から検出される。

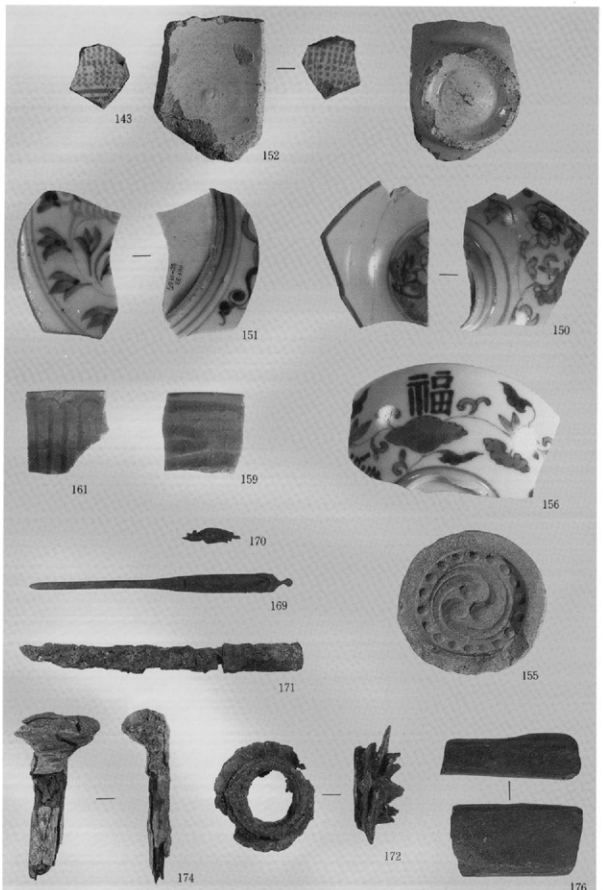
9．小　結

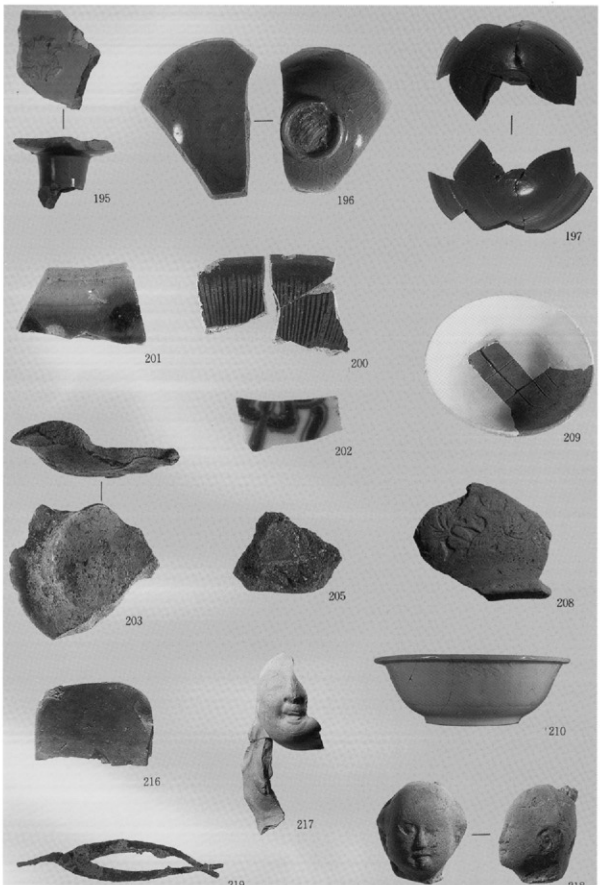
今回の調査では弥生時代では城ノ越式の甕棺片を検出、古墳時代では庄内式新～布留式古段階系の畿内山陰系のまとまった資料を検出し在地系を圧して、外来系の土器が卓抜する。また、半島系陶質土器も注目される。奈良時代は一つのピークで前半期に集中する。平安末は最盛期で多量の中国産陶磁と若干の高麗青磁を検出する。磁灶窯系の盤はタイプ別にA1－4・A2－1・B1－1・B2－6・B3－2・C1－9・C2－12・C3－8・D－20・E1－5・E2－10・F－21・G－33点と鎬口縁系4点主縁口縁系118点と後者が圧倒する。この類別が時期差か産地差かは形態のみではなく技法も加味しさらに検討する必要があろう。

古墳時代から大正時代まで、釉裏紅壺他様々な外来系遺物を検出し、一地点の調査ながらこれら外来の文物を招来しつづけた博多遺跡群の有り様を如実に物語っている。


8
9
18
12
20
24
61
57
63
62
64


34
36
65
69
58
108
138
135


143
152
151
150
161
159
福
156
170
169
171
155
174
172
176


195
196
197
201
200
209
202
203
205
208
216
217
210
219
218

博多 58

－博多遺跡群第86次発掘調査概報－

1997年（平成9年）3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9番7号